仙台市文化財調査報告書第107集

年　報　8

昭和61年度

昭和62年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第107集

年　報　8

昭　和　61　年　度

昭和62年 3 月

仙　台　市　教　育　委　員　会

序

近年の報道活動の中で文化・生活に関する紙面の割合が非常に高くなっていることに気づくとともに、なかでも伝統文化等の地域に根ざした記事が注目をあつめております。これは高学歴社会、高齢化社会、余暇時間の増大のあらわれの中で、市民の多様化した学習ニーズが漸次高揚していることの反映ともいえましょうか。

こうした社会的背景をもとに文化財行政の一環として今年度も高まりつつある学習ニーズに対し、さまざまな事業を起案して実施してまいりました。本書はそうした実施事業の成果をまとめ報告するものであります。

今度はこうした成果について詳細な分析と検討を行いより高次の事業企画を立案し、市民のなおいっそうのニーズに答えるべく努力する所存であります。

市民のみなさまのさらなるご支援並びにご助言をお願い申し上げ刊行のごあいさつとします。

昭和62年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

目　　次

序
目　次
例　　言
Ⅰ　事業報告 …… 1
1.　管理関係 …… 1
2.　調査関係 …… 4
3.　普及啓蒙関係 …… 7

Ⅱ　調査等報告 …… 9
1.　郡山遺跡第64次発掘調査 …… 9
2.　今市遺跡試掘調査 …… 24
3.　富沢遺跡発掘調査 …… 29
4.　燕沢遺跡出土の軒丸瓦（資料紹介） …… 38

例　　言

1.　本書は、仙台市教育委員会文化財課が昭和61年度に行った文化財の調査、普及啓蒙活動、保護管理に関する各事業についての年度報告書である。

2.　調査等の報告は、昭和61年度実施した発掘調査等のうち、独自に概報もしくは報告書にまとめるに至らなかった小規模なもの４件を掲載した。

執筆担当は次のとおりである。

Ⅰ－1　山口　宏	Ⅱ－1　金森安孝
Ⅰ－2　結城慎一	Ⅱ－2　結城慎一
Ⅰ－3　小野寺和幸	Ⅱ－3、4　渡部弘美

3.　本書の編集は、調査係の結城慎一及び管理係の山口宏が主に当ったが、課全員の協力をあおいだ。

Ⅰ　事業報告

1.　管理関係

(1)　一般文化財

①　文化財保護委員会の開催

定例会（隔月隔数月）６回を開催。建造物６件〔成覚寺山門、荘厳寺山門、輪王寺山門、大満寺虚空蔵堂附厨子、大願寺山門、（旧万寿院殿霊屋門）、泰心院山門（旧仙台藩藩校養賢堂正門）〕を市の有形文化財に指定した。

②　文化財パンフレッドの作成

第11集「仙台の民族芸能」を発行した。

③　説明板、標柱の設置

説明板４基（四ツ谷用水、笹谷街道の道標、伊達政宗灰塚、法領塚古墳）、標柱１基（亀岡八幡神社石鳥居）を設置した。

④　辻標の設置

５基を設置した。今年度までで54基となった。（設置町名・通名；本材木町／本櫓丁、鉄砲町／明神横丁、東七番丁／柳町通、名掛丁／日吉丁、新伝馬町／東五番丁）

⑤　文化財めぐり、講座、文化財展の開催

行事名	講師等	参加者	実施月日	内容
「縄文人のくらし 山田上ノ台遺跡展」	会場；仙台市博物館 ギャラリー 会場；藤崎デパート リビング館 市民ホール	1,500名 2,500名	昭和61年 9月13日～9月25日 12月12日～12月17日	昭和55年に実施した山田上ノ台遺跡の発掘調査の成果をもとに、縄文時代人のくらしぶりについて実験考古学的成果をふまえて展示。
講演会「縄文人の知恵を発掘する」	講師；楠本政助氏（実験考古学）	150名	昭和61年９月20日	縄文時代に使用された日常用具に秘められた生活の知恵を実験考古学の成果から探る。
体験学習「縄文人の知恵に挑む」	指導；大場拓俊氏（陶芸家） 森　剛男氏（宮城県文化財保護指導員）	20名	昭和61年 9月17日～9月19日 9月24日～9月25日 10月日22～10月23日	縄文土器作り 野焼き、実際に土器をつかって料理に挑戦
「タウン・ウォッチングQ&A 文化財編」－道ばたの文化史を歩く－	講師；逸見英夫氏（郷土史家） 佐藤昭典氏（〃） その他地域の人々３名	55名	昭和61年11月２日	ひっそりと、たくましく生き続けている小さな文化財（石碑、小祠、等）に焦点をあて、時の流れの中にある町の姿と人々のくらしの関わり方をさぐる。
民族芸能のつどい パート２「仙台のお神楽 揃いぶみ」	講師；千葉雄市氏（宮城県文化財保護審議会委員）	350名	昭和62年３月１日	仙台市内で活躍している各神楽の保存会７団体の方々に集まってもらい、各団体の代表的な舞を各１番ずつ披露してもらった。
第９回　文化財展「時をこえて」	会場；市役所 １階ロビー	3,000名	昭和62年 3月16日～3月28日	昭和61年度に実施した発掘調査の成果を６つのコーナーにわけて展示紹介した。

⑥　文化財指定候補物件調査

仙台市新坂町、大願寺にある伊達政宗の灰塚並びに永昌寺にある保春院（政宗の母）の灰塚の現況調査を実施した。又、これまでこの調査で実施した建造物９件の報告について、「文化財分布調査報告Ｖ」としてまとめた。

註：灰塚…伊達氏は４代綱村の時まで藩主並びに夫人が死去すれば葬礼以前に埋葬し中陰の法要期間後に空棺を以て葬礼が行われ、棺を焼いた灰を銅函に納め円塚を築き矩形の土居と周濠で囲み、灰塚と称した。

⑦　無形民族文化財記録保存

60年度に続き、大崎八幡神社の能神楽（宮城県指定無形民俗文化財）をビデオで記録した。

⑧　文化財の防災点検

高齢の文化財防災デー（１月26日）に伴い、市消防局による指定有形文化財（建造物）の防災設備の事前査察の実施。また、防災デーには防災訓練りを行った。

(2)　補助事業

①　県費補助事業

㋐　指定文化財保存管理費補助

大崎八幡神社（国宝、重文）・東照宮（重文）――防災設備の保守点検及び一部修理に対しての補助

㋑　無形文化財技術保持費補助

館山甲午氏（平曲技術保持者）、甲田綏郎氏（精好仙台平技術保持者）、大崎八幡神社能神楽保存会の技術保持のための事業に対し補助

②　国庫補助事業

㋐　陸奥国分寺跡土地買上げ事業

陸奥国分寺跡の保護活用をはかるため、史跡地内の土地389.98㎡を買収した。（史跡指定面積の23.5％にあたる。）

㋑　遠見塚古墳環境整備事業

昭和50年度からはじまったこの事業も今年度をもって完了した。そこで今年度は事業の最終工事として、今後この史跡を訪れる利用者の便宜をはかるためのエントランス・園路の設置、及びこれまでの発掘調査の成果をコンパクトに紹介するための説明板の設置工事を行った。

㋒　郡山遺跡ほか発掘調査事業

郡山遺跡――この遺跡の調査は昭和55年度から始まり、今年度で７年目をむかえた。今年度の調査の目的はⅡ期官衙跡（古代の役所跡）に附属して造営されたと考えられる寺院跡の実態の究明とそれらに先行したⅠ期官衙跡の確認であった。この結果、寺院中枢部を構成したと考えられる建物群跡及びそれらを区画したと考えられる塀跡（材木列）等の遺構を確認することができた。

仙台平野の遺跡群――個人住宅の建築に伴う発掘調査及び重点遺跡の範囲確認、性格究明の調査を実施した。調査実績として、陸奥国分寺跡、同尼寺跡各１件、富沢遺跡１件、郡山遺跡５件がある。

体験学習
「縄文人の知恵に挑む
―野焼き―」

民族芸能のつどい
パート２
「仙台のお神楽
揃いぶみ」

2．調査関係

1．文化財保護法第57条の2、3に係る届・通知の仙台市文化財課受付件数は今年度2月末現在で370件となっている。この件数は昨年同期と比べると16件多く、最終的に3月末までの受付件数は昨年度より若干上回って400件を越える見込みである。この件数は昭和57年度届・通知件数269件を100とし、今年度の届等件数を400件とすると149という指数となる。5年間で50％の増加ということになる。その間の動きを見ると、58年度に一旦減少し、59、60年度と加速度的に伸びている。特に59年度から60年度の増加は106件であり約37％の伸びであった。それから見ると今年度は昨年度を上回ったといえども若干であり、ほぼ横這いと言えるであろう。（表3）

2．昭和58年度以来の月別届等件数を見ると、多い月と少ない月がもちろんあるが、月による傾向はとらえられない。あえて言えば、3月、4月に多いということが共通点として指摘できよう。（表1）

3．ところで昨年度と今年度で届等件数の多かった遺跡を比較すると以下のようになる。

60年度			61年度		
1.	94件	富沢	1.	64件	富沢
2.	35件	欠ノ上	2.	47件	南小泉
3.	28件	郡山	3.	34件	郡山
4.	23件	南小泉	4.	23件	欠ノ上
5.	19件	仙台城	5.	18件	仙台城
6.	13件	東郊条里	6.	17件	戸ノ内
7.	11件	戸ノ内	7.	9件	鴻ノ巣
8.	9件	鴻ノ巣	8.	8件	出花
9.	〃	福田町	9.	7件	山口
10.	7件	燕沢	10.	6件	沖野城
	〃	明屋敷			

61年度の件数は2月末現在のものである。これを見るとわかるように、富沢遺跡が圧倒的に多い。これは東北最大の区画整理地であり、まだまだ宅地が残っており、地下鉄が走るなどの条件が開発・建築行為を引き続き多くする要因であろう。

4．届等の対応情況は、60年度396件のうち344件が立ち会い、51件が試掘・事前調査で、61年度370件（2月末現在）のうち335件が立ち会い、35件が試掘・事前調査扱いになっている。

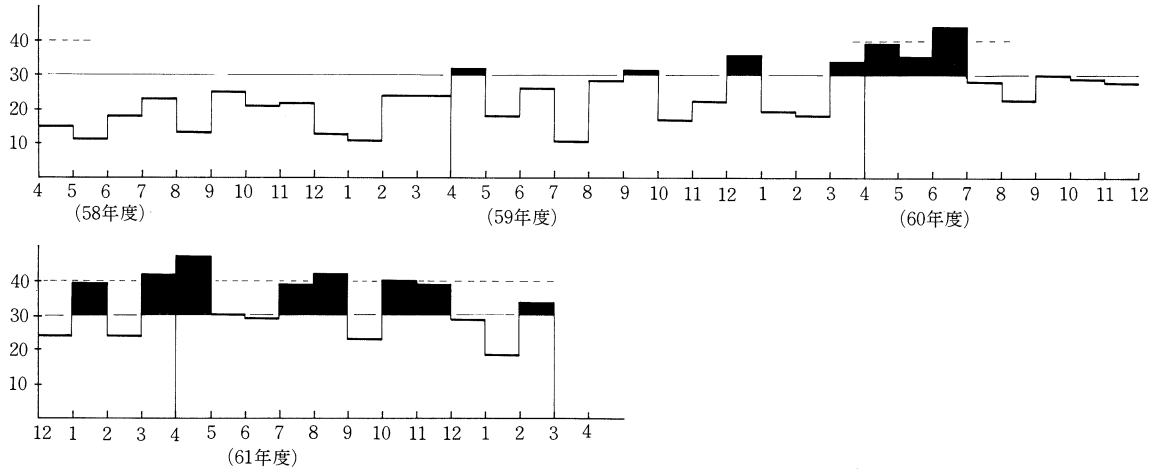


表 1　発掘届・通知の月別推移

	遺　跡　名	時　代	種　類	調査面積	調査期間	担当職員	報告書	事業別
1	郡　山	古墳～奈良	官衙・寺院跡	1,468㎡	5/6 ～ 12/27	木村・及川・松本（素）	96集	国庫補助
2	仙台平野の遺跡群	古墳～平安	水田・寺院跡・官衙跡	734㎡	5/6 ～ 12/26	松本（清）・金森・結城	97集	〃
3	郡　山	縄文～平安	水田・集落跡	1,800㎡	4/4 ～ 1/14、3/9 ～ 3/27	長島・千葉・及川・中富・佐藤（良）	－	自　主
4	北　前	平安・近世	窯跡・その他	3,850㎡	4/22 ～ 9/8	小川・佐藤（美）	105集	〃
5	五本松窯	平　安	窯　跡	650㎡	9/19 ～ 12/17	〃・〃	99集	〃
6	富　沢	弥生～近世	水田跡	72㎡	5/22 ～ 8/1	吉岡・斎野	98集	〃
7	〃	〃	〃	4,000㎡	4/12 ～ 12/27	工藤・太田・平間・鈴木	－	〃
8	〃	〃	〃	700㎡	9/1 ～ 12/26	佐藤（甲）・佐藤（淳）・渡部（紀）	－	〃
9	〃	〃	〃	88㎡	7/28 ～ 9/1	渡部（弘）・高橋（勝）	107集	受　託
10	〃	〃	〃	95㎡	11/10 ～ 1/19	〃・〃	〃	〃
11	〃	〃	〃	230㎡	6/6 ～ 8/30	金森・松本（清）	104集	〃
12	郡　山	平　安	官衙・寺院跡	80㎡	9/24 ～ 10/22	〃・〃	107集	〃
13	伊古田	縄　文	集落跡	430㎡	7/30 ～ 9/5	吉岡・篠原・佐藤（良）	101集	〃
14	六反田	縄文～平安	〃	490㎡	4/22 ～ 12/25	〃・〃・〃	〃	〃
15	南小泉	古墳～近世	〃	520㎡	4/14 ～ 7/11	佐藤（洋）・鈴木	－	〃
16	元袋Ⅲ	奈良・平安	〃	1,820㎡	4/10 ～ 7/22	渡部（弘）・高橋（勝）	103集	〃
17	東光寺	中世・近世	信仰遺跡	300㎡	10/23 ～ 2/12	金森	－	〃
18	大年寺山横穴	古墳・奈良	横穴古墳	40㎡	2/23 ～ 2/27	結城・佐藤（淳）	－	その他

表 2　昭和61年度発掘調査概略

5．また実際に実前調査を行ったのは、60年度が24件（うち19件は市教委担当）で61年度が2月末までで22件（うち16件が市教委）である。

6．昭和61年度発掘調査事業：国庫補助事業として、郡山遺跡、仙台平野の遺跡群の発掘調査（郡山、国分寺、国分尼寺、富沢遺跡）がある。自主事業としては、郡山、富沢、北前、五本松窯跡の各遺跡の市公共事業に拘わる発掘調査がある。受託事業としては、郡山、富沢、南小泉、伊古田、六反田、元袋Ⅲ、東光寺の各遺跡の民間等の開発に拘わる発掘調査がある。以下、主な調査の概要を述べる。

国庫補助事業については前項を参照していただきたい。

富沢遺跡では7地点の調査を行い、弥生時代から近世にわたる水田跡を確認。特に弥生時代の水田跡では、1区画が0.7×0.7m位の全国一小さいミニ水田や、天王山式期の水田跡が東北地方で初めて発見された。

五本松窯跡は昨年に引き続き実施したものであるが、計12基の窯を発見。窯を覆った覆屋の柱穴も全国で初めて発見された。

北前遺跡の調査では近世の杉土手の調査を行ったほか、市内で最西端になる窯跡が1基発見された。

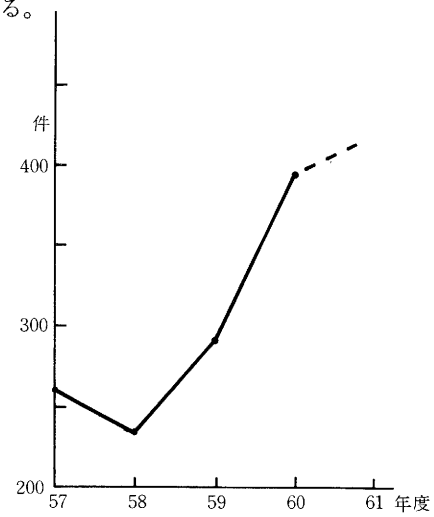
南小泉遺跡では近世、中世、奈良、平安、古墳時代の住居跡、溝跡、墓壙が発見され、近世の墓壙からは金箔瓦や陶器などが出土した。

六反田遺跡では平安、縄文時代の住居跡が、元袋Ⅲ遺跡では奈良、平安時代の住居跡が発見された。

東光寺遺跡は中世の遺跡で、石窟、石窟仏の実測調査を行い、新たに井戸状遺構、階段遺構、十王堂跡と思われる遺構を発見した。

その他、61年8月5日の豪雨による大年寺山横穴古墳群範囲内での土砂崩れ箇所防災工事により横穴が発見され、県と市合同で9基調査している。

表3　発掘届・通知の年度別推移 ▶



3．　普及啓蒙関係

歴史を体験

文化財というと古色蒼然たるカビ臭いイメージ、あるいは、どこかの立派な建物の中にでんと腰を落ち着け、ガラスケースの中に収まったものを連想しがちである。

しかし、文化財とは長い年月にわたって人々に受け継がれ、伝わってきたものなのである。私達の身のまわりにも名もない文化財がたくさんある。春になると神社の境内で舞われる神楽、地中深く眠った過去の人々の生活の跡なども文化財なのである。そこからは当時の人々の生活の臭いが伝わってくる。歴史を書物から解き放ち、自らの五官を通して体感してもらおうといくつかの試みを実施した。

(1)　縄文人のくらし――山田上ノ台遺跡展――

山田上ノ台遺跡に展開された縄文人の暮らしを55年の発掘調査の成果より展示した。会期中、縄文人の暮らしを多角的に理解する手だてとして、楠本政助氏による講演会、煮炊きできる縄文土器を目指した「縄文土器に挑む」の各行事も実施した。

(2)　体験学習

社会科の授業として発掘調査を通して地域の歴史を学習した西多賀小・鹿野小・若林小、夏休みに石器づくりや火起こしに挑戦した「親子で体験」などを実施した。

(3)　現地説明会

発掘調査の終盤に調査によってどんなことが分かったかを発見した遺構（生活の跡―住居や井戸など）や遺物などで説明する。今年度は南小泉遺跡をかわきりに、２月８日の東光寺遺跡の現地説明会まで７回行った。多くの人の参加を得、自分達の住む地域の歴史に対する関心の深さに改めて驚かされた。

今年度も多くの発掘調査が行われた。その結果、数多くの貴重な文化遺産を失ってしまった。それ故に多くの市民の方々に新しい歴史的事実を伝えたいと思う。

(4)　その他

その他の普及事業として、文化財めぐり、民俗芸能大会、広報文化財の発行も行った。

●縄文土器製作工程記録

講師：大場拓俊氏

９月17日　「縄文原体作り」

９月18日　粘土で「土器成形・整形」

粘土紐で輪積み。底面にはトチ、ホウの葉をしく。ケズリ。

9月19日　土器に「施文」

沈線、隆線及び縄文原体をころがす。

9月24日　「器面調整」(10：00～15：00)

石を使用してミガキを行う。上半が中心。

9月25日　「器面調整」(10：00～15：00)

下半を中心にミガキを実施。

9月26日

～　　「土器乾燥」成作土器等、大小23個体。

10月28日

10月28日　土器焼成にそなえて「空焚き」(9：30～16：00)

焼成用土坑は約径2m、深さ0.3mに掘る。

10月29日　再び「空焚き」(6：00～8：15)

土器を最終的に乾燥させるため「火あぶり」(8：15～10：15)

「焼成」　土器を稲ワラでおおって燃やす。(10：15～10：30)

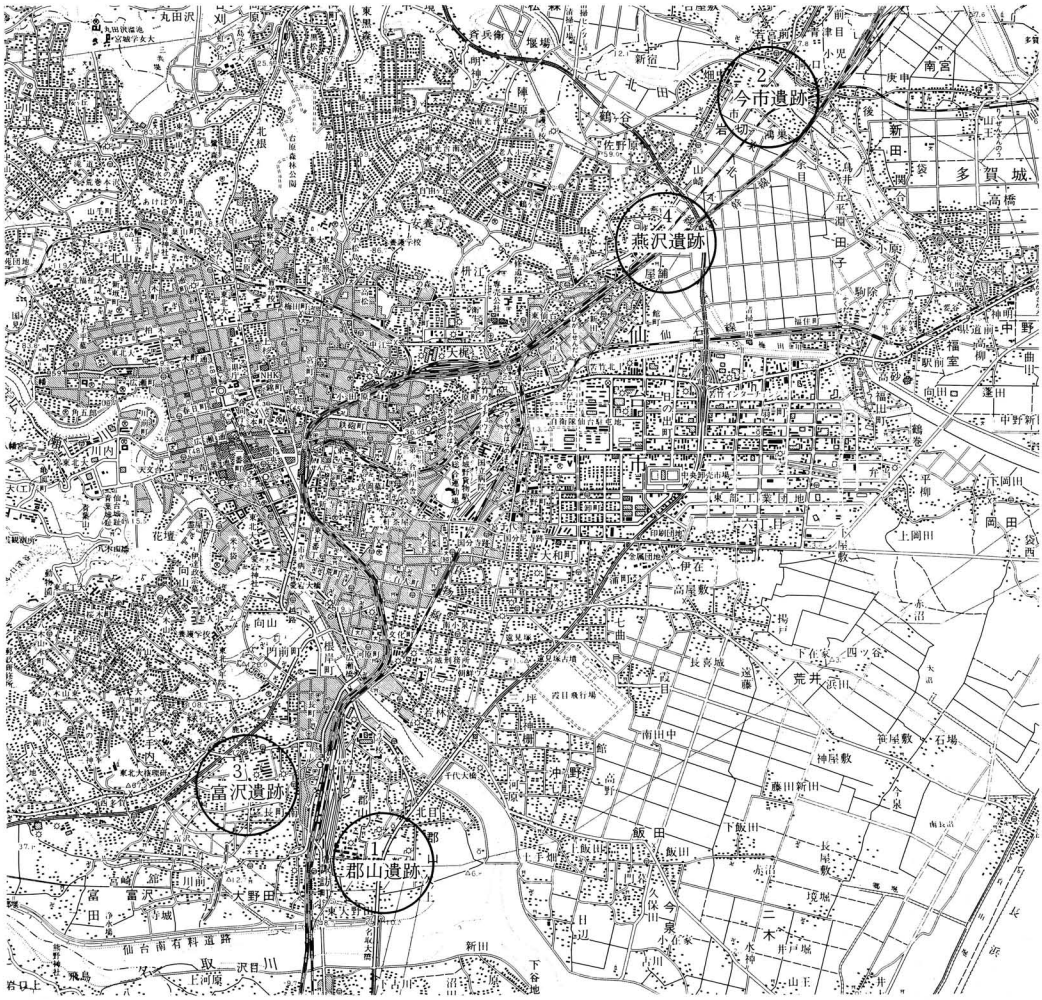
焚火をくりかえす。(10：30～15：00)

※　空焚き～焼成時の使用燃料量　マキ：3トン車3台分、稲ワラ：1トン車1/3台分

10月30日　「土器取上げ」(9：40～10：00)

▲只今，土器焼成中

Ⅱ　調査等報告



関係遺跡位置図

1．郡山遺跡第64次発掘調査

1．調 査 要 項

遺跡名　郡山遺跡（仙台市文化財登録番号：C―104）

所在地　仙台市郡山五丁目152－1

調査原因　高圧送電線鉄塔建設工事

原因者　東北電力株式会社宮城支店

対象面積　121㎡

調査面積　約80㎡

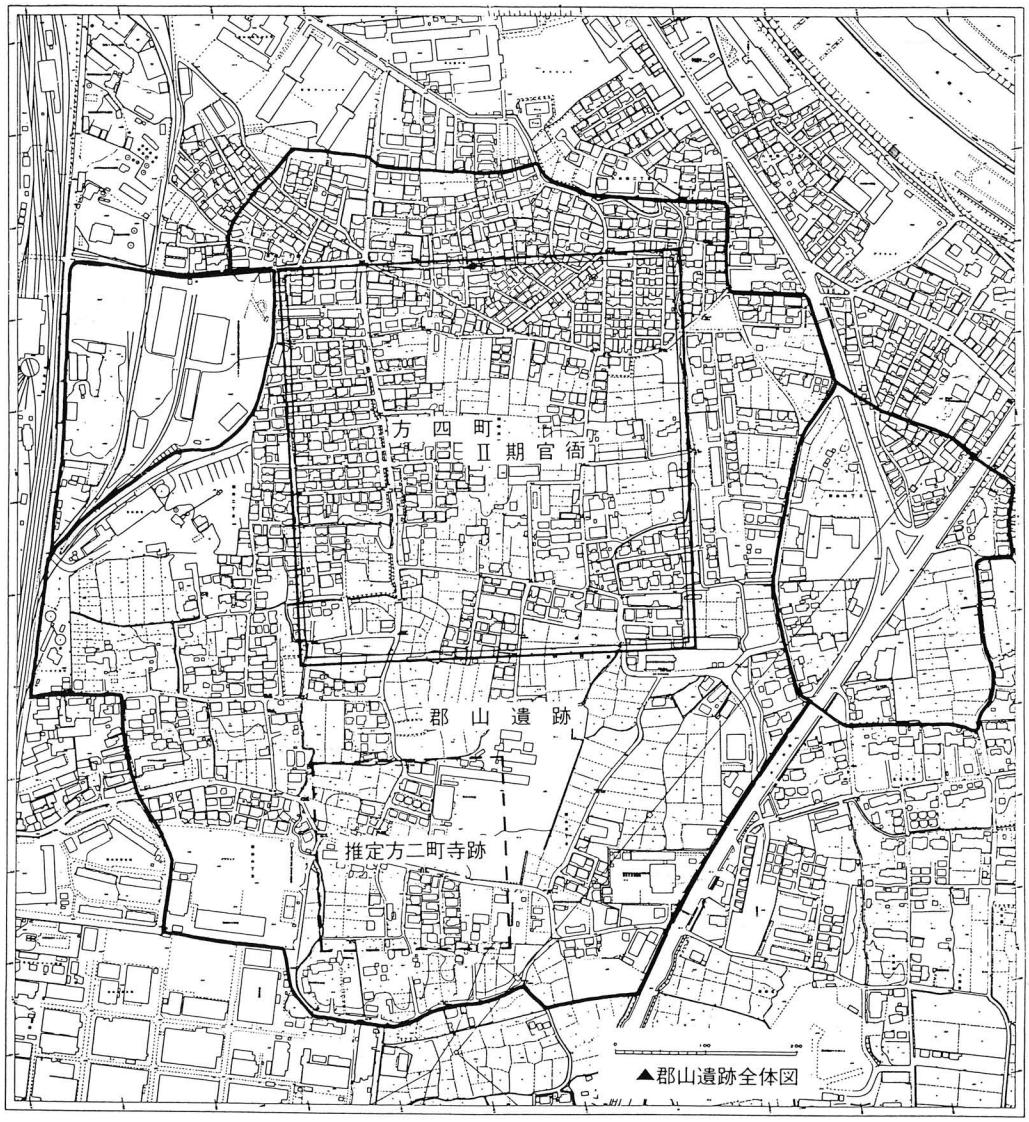
調査期間　昭和61年９月24日～10月22日

調査員　金森安孝・松本清一

調査・整理参加者　小林　充・小野寺雄・大友義信・山田　太・庄子信哉・鈴木正道・佐藤浩道・小山羊右・山寺槙子

２．遺跡の立地と環境

郡山遺跡は仙台市郡山二丁目から六丁目に及び、西は東北本線から東は仙台バイパスまで、南は諏訪神社から北は八本松との境界まで、東西800m、南北900mの広がりが考えられる。



第１図　郡山遺跡全体図

遺跡の北側は広瀬川が形成した標高10～12mの自然堤防で、南にかけて低くなり、標高６～８ｍの名取川の氾濫原へと移行する北高南低の土地である。

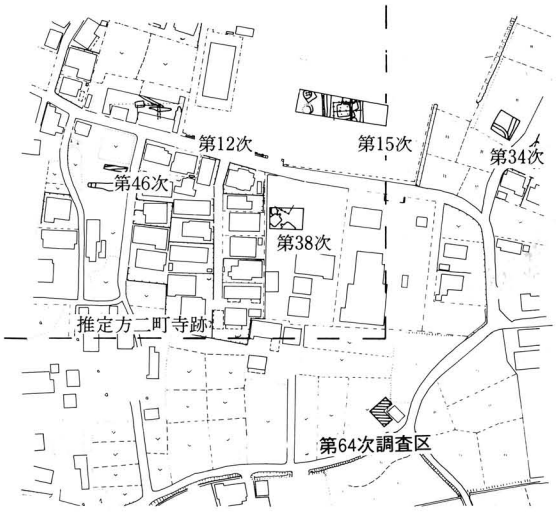
昭和54年度に実施された宅地造成にかかる発掘調査を契機としてスタートした「郡山遺跡範囲確認調査」の成果によって、遺跡の中央寄りには真北方向を基準とする方四町のⅡ期官衙域が占めている。さらにⅡ期官衙に先行する遺構の方向性の異なる建物群の存在が確認され、このⅠ期官衙は遺跡範囲のほぼ全域に広がっているものと考えられている。また、Ⅱ期官衙の南側に一町隔て、方二町程度と推定される寺院があり、その中心部には瓦の散布状況から寺院中枢建物群の存在が考えられている。

これらの遺構群は、７世紀中葉から８世紀初頭にかけての官衙跡と推定され、その性格や古代陸奥国の中での位置づけ等の究明のため、昭和62年度以降も発掘調査は継続されている。

遺跡の周辺には、北西部に縄文・弥生土器を出土する西台畑遺跡、南部に的場・籠ノ瀬遺跡、南東部に矢来・欠ノ上Ⅰ・欠ノ上Ⅱ・欠ノ上Ⅲ遺跡がある。また、東部には15世紀に粟野大膳が居舘とし、後に伊達政宗が居舘とした北目城跡がある。さらに、遺跡の周辺には14世紀初めの古碑群が点在しており、先史時代から歴史時代を経て現在まで、連綿と生活の痕跡をとどめている地域といえる。

３．調査に至る経過

仙台市一番町三丁目７番１号、東北電力株式会社宮城支店取締役支店長深井保夫より、郡山五丁目152－１において高圧送電線鉄塔の老朽化に伴う新設工事のため、昭和61年１月14日付け、宮支立用第545号で発掘届が提出され、事前協議により郡山遺跡における第64次調査として発掘調査を実施した。



第２図　調査区位置図

調査個所は、郡山遺跡の南辺部にあたり、推定方二町寺域外の南東外方に位置する。

昭和60年度以前に実施された本調査区近辺の調査としては、第38次（昭和58年度）、第58次（昭和60年度）などがあり、各々の調査箇所は、Ⅰ期官衙およびⅡ期官衙併行寺域内に位置していることが確認されている。

また、現況地形比較によれば、推定寺域内の標高９ｍ台に比し、本調査区は７ｍ台と次第に南低傾斜を示し、旧河道の段差まできわめて近く、遺跡の拡がりの南限を確定する区画施設等の遺構の存在が推測された。

調査区は、現存する鉄塔の西・南側の畑地にL字形、約80㎡を設定し、重機を用いて耕作土を排除した跡、遺構の検出作業を行った。その結果、耕作による天地返し等による攪乱が著しいものの、現地表より30～50㎝下のⅡ層上面及びⅢ層上面で精査を行い、南北方向に延びる溝跡3条、土坑2基、性格不明遺構1基を検出した。

その後、同時期に実施されていた郡山中学校校舎新築工事に伴う第65次調査との基本層位対比のため、調査の西角の一部分を掘り下げ、調査を終了した。

4．基本層位

当調査区において認められた基本層位はⅠ層～Ⅺ層である。土質の点からⅠ層のシルト層(耕作土)、Ⅱ・Ⅲ層のシルト層（遺構確認面)、Ⅳ～Ⅸ層の粘土質シルト層、Ⅹ・Ⅺ層以下の砂質シルト層の4層に大別できる。Ⅲ層とⅧ層については褐色の粘土層を縞状に互層としてはさみ、植物遺体の堆積層と考えられ、他の各層の形成は、河川による沖積作用に基づくものであろう。

第65次調査（郡山中学校）における基本層位の対比から、Ⅳ層は第65次調査区の7層に、Ⅵ層は11層に対応し、古代以前の遺構、遺物の存在が期待されたが、深掘りをかけた調査面積も小さいこともあって、当調査区では確認できなかった。

5．発見遺構

今回の調査で発見された遺構は、Ⅱ層上面で溝跡1条と性格不明遺構1基、Ⅲ層上面で溝跡2条、土坑2基、ピット11である。これらは耕作土下層の地山上面で発見されたが、磁北方向に延びる天地返しや攪乱による掘削を受けており、遺構を検出した標高は7.7～8.0mと差異がみられた。

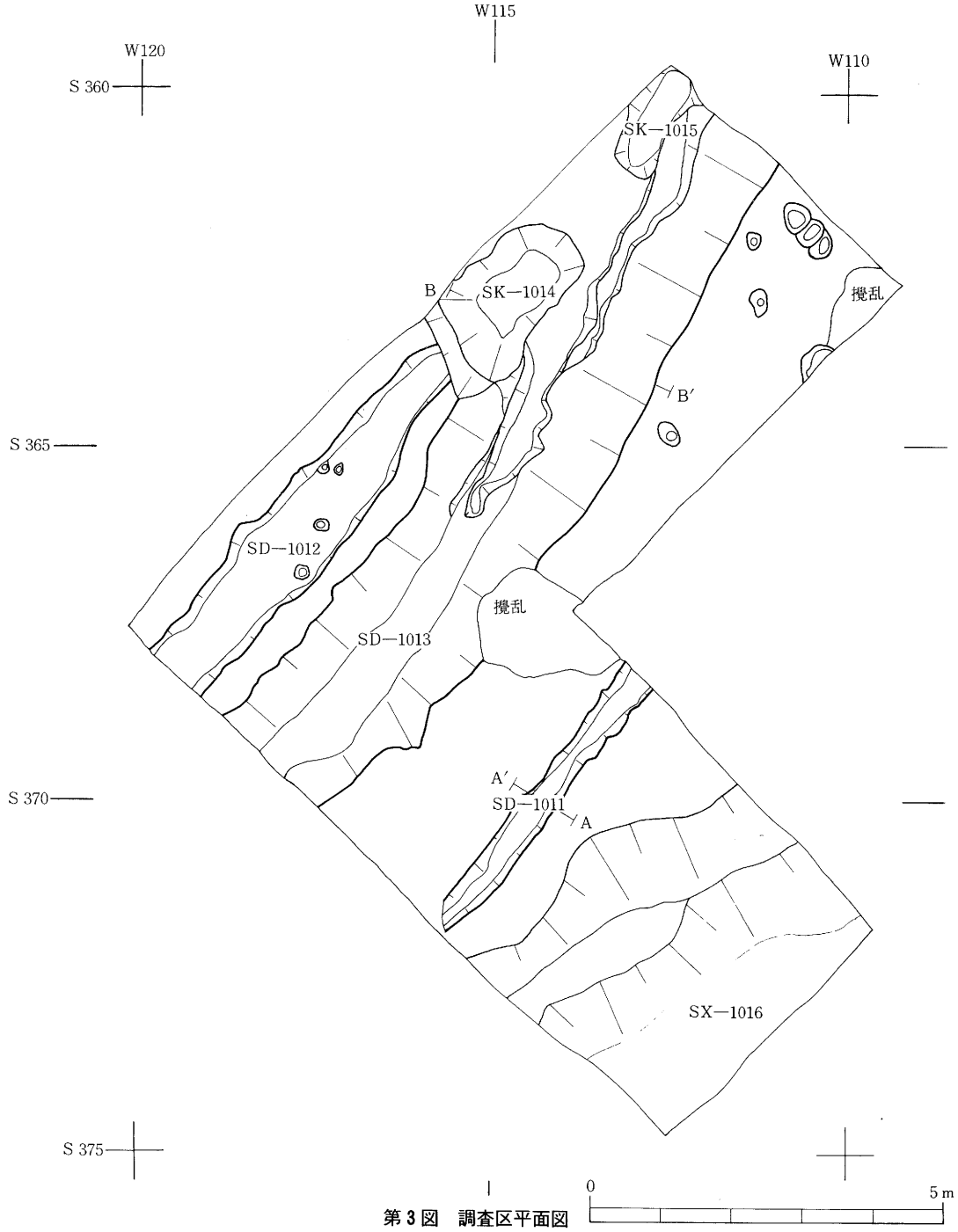
ＳＤ1011溝跡　Ⅱ層上面、調査区内で5.7m分を検出した。上幅30～70㎝、下幅10～40㎝、深さ7～13㎝、横断面形は調査区の北側で歪んだ舟底形、南側で逆台形を呈し、方向はN―39°―Eである。堆積土は2層に分けられ、1層は暗褐色シルト、2層は灰黄褐色粘土質シルトで、共ににぶい黄橙色シルトを小ブロック状に含み、土師器、瓦を出土した。

ＳＸ1016性格不明遺構　Ⅱ層上面、調査区南東部で遺構の一部を検出した。調査区壁断面の観察からN―57°―E前後の方向性を有する南東方向への落ち込みと考えられ、堆積土2層中で直径5～10㎝程の2本の打ち込み杭を検出している。調査区内で長さ5.5m、上幅は4.7m以上、下幅は1.9m以上、深さは83～101㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、途中で平坦な段を有する。堆積土は3層に分けられ、1層は褐色シルト、2層は暗褐色シルトで、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、鉄製品などを出土している。3a層はにぶい黄褐色シルト、3b層は褐灰色粘土質シルトである。

ＳＤ1012溝跡　Ⅲ層上面で検出した溝跡で、調査区内で7.3m分を検出した。上幅0.7～1.6m、下幅0.4～1.4m、深さ3～12㎝、横断面形は舟底形を呈し、方向はN―40°―Eである。

堆積土は暗褐色シルトで、土師器、須恵器、瓦を含んでいる。ＳＤ1013溝跡を切っている。

ＳＤ1013溝跡　Ⅲ層上面で検出した溝跡で、調査区内で14.2m分を検出した。上幅1.8～2.7m、下幅0.6～1.9m、深さ28～78㎝、横断面形は舟底形を呈し、方向はＮ―30°―Ｅ、調査区



第３図　調査区平面図

の北寄りの部分で西側に広がり、底面のレベルは北にむけて徐々に低くなっていく。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は黄褐色系のシルトで土師器・須恵器・瓦・陶器を含む。2層は暗褐色系粘土質シルトで土師器・須恵器・磁器・瓦・土製品・鉄製品を含み、3層は褐灰色系粘土質シルトで土師器・須恵器・瓦を含んでいる。SD1012溝跡に切られ、SK1014・SK1015土坑を切っている。

SK1014土坑　SD1013溝跡の底面で検出した土坑で、検出上面での長軸長3.2m、短軸長1.4m、下端0.8×1.5m程の隅丸方形のプランを有す。長軸方向はN—43°—E、深さは58～85cm、底面は平坦で、断面形は逆台形を呈す。堆積土は粘土で3層に分けられ、1層は灰黄褐色、2・3層は黄灰色で一部が青灰色にグライ化し、植物遺体を含む。SD1013溝跡に切られる。

SK1015土坑　SD1013溝跡の底面、調査区の北端で一部を検出した土坑で、長軸長2.0m以上、短軸長0.8m、下端0.5×1.8m以上の方形のプランを有す。長軸方向はN—28°—E、深さ37～58cm、底面は平坦で、断面形は逆台形を呈す。堆積土は2層に分けられ、1層は灰黄褐色シルト質粘土、2層は黒褐色粘土で植物遺体を底面に多く含む。出土遺物はない。

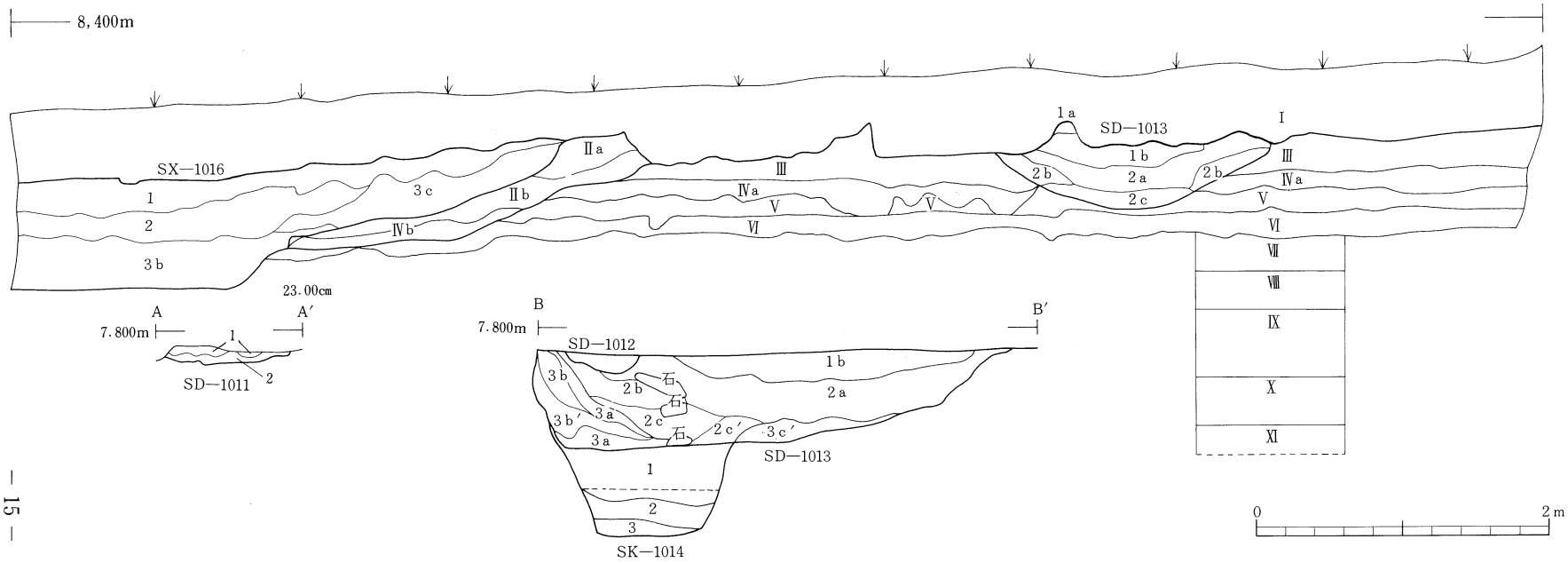
6．出土遺物

第64次調査による出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、陶器、磁器、石製品、木製品、金属製品、土製品などである。出土遺物の量は比較的少なく、収納用コンテナ3箱分である。SD1013・SX1016からの出土量が大半を占めている。

SD1011溝跡　堆積土中から土師器片、丸瓦を出土している。

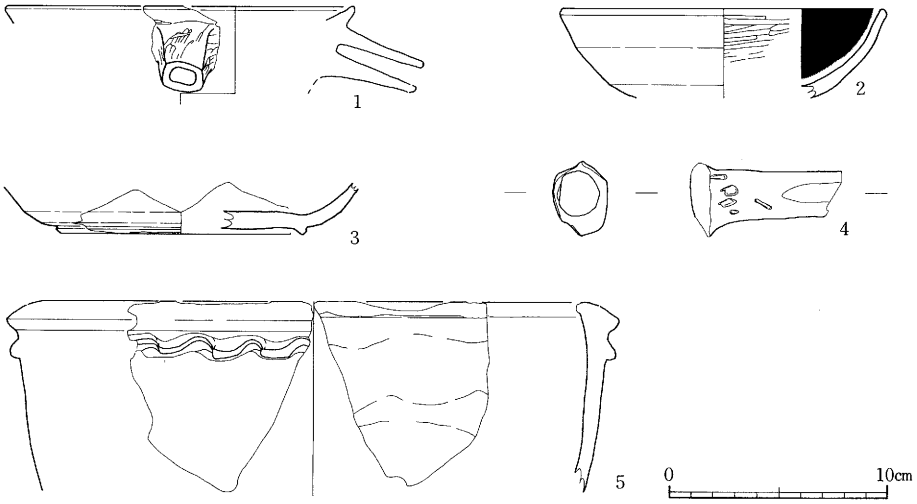
SD1012溝跡　堆積土中から土師器片、須恵器片、瓦を出土している。土師器C—625（第5図1）は口縁部から把手部にかけての破片で、内外両面をヘラミガキ・黒色処理を施している。

SD1013溝跡　堆積土中から土師器坏・甕・須恵器坏・蓋・甕、瓦、陶器、磁器、鉄製品、鉄滓、土製品を出土している。1層から出土した土師器坏（第5図2）は、口縁部から体部下半にかけての1/6の破片で、内面はヘラミガキ・黒色処理を施し、外面はロクロ調整されている。須恵器坏（図版4—2）は底部から体部下半にかけての1/2破片で、底部から体部にかけてヘラ調整されている。外面には火だすきがみられる。軒丸瓦F—69は中房から内区にかけての小破片である。丸瓦（第5図8）は筒部の破片で、凸面に縄叩き痕がみられ、凹面は布目痕で斜め方向の擦痕が全体にみられる。二次加熱を受けている。丸瓦（第5図9）は筒部の破片で凸面はナデ調整され、凹面には布目痕がみられる。平瓦（第5図6・7）は凸面に縄叩き痕がみられ一部ナデ消され、凹面には布目痕、模骨痕がみられる。青磁J—5（図版4—3）は皿の高台部の小破片で、厚い緑灰色のガラス質の釉が内外面にみられる。鉄製品N—41は刀子と

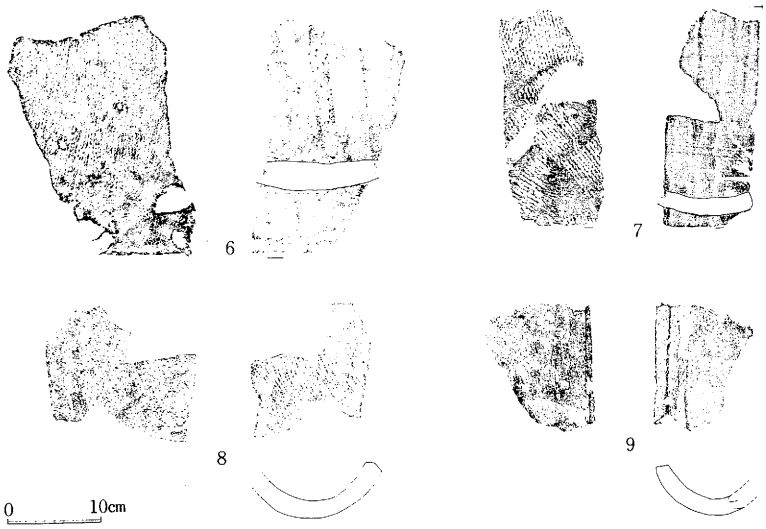


第4図　調査区南西壁・遺構断面図

層No.	土色	土質	その他
Ⅰ	10YR4/4 褐	シルト	10YR3/4暗褐色と10YR4/4にぶい黄褐色とをブロック状に含む（耕作土）。
Ⅱa	10YR4/2 灰黄褐	シルト	
Ⅱb	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	7.5YR3/4，暗褐シルトを粒状に含む。
Ⅲ	10YR6/3 にぶい黄橙	シルト	第65次基本層位6a～c層に対応。
基本層位 Ⅳa	7.5YR4/1 褐灰	粘土質シルト	第65次基本層位7層に対応。
Ⅳb	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	10YR3/2黒褐色粘土質シルトを全体に含む。
Ⅴ	10YR5/2 灰黄褐	粘土質シルト	第65次基本層位8～9層に対応。
Ⅵ	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	第65次基本層位11層に対応。
Ⅶ	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	
Ⅷ	10YR5/2 灰黄褐	粘土質シルト	10YR3/2黒褐色粘土質シルトを斑点状に含み，7.5YR5/8明褐色粘土質シルトとの互層。
Ⅸ	2.5YR6/2 灰黄	粘土質シルト	10YR3/2黒褐色粘土質シルトを全体に斑点状に含む。
Ⅹ	2.5Y5/4 黄褐	砂質シルト	
Ⅺ	2.5GY4/1 暗オリーブ灰	砂質シルト	
SD 1011			
1	10YR3/4 暗褐	シルト	10YR6/4にぶい黄橙シルトをまばらに少量含む。
2	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	10YR6/3にぶい黄橙シルトを小ブロック状に少量含む。
SD 1012			
	10YR3/3 暗褐	シルト	10YR6/3にぶい黄橙シルトをまばらに少量含む。
SD 1013			
1a	10YR4/4 褐	シルト	10YR3/2黒褐色粘土質シルトを斑点状に全体に含む。
1b	10YR5/3 にぶい黄褐	シルト	10YR3/2黒褐色粘土質シルトを斑点状に全体に含み，10YR6/3にぶい黄橙粘土質シルトをブロック状に含む。
2a	10YR3/3 暗褐	シルト	灰白火山灰を帯状に少量含み，瓦，礫を含む。
2b	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粘土を小ブロック状に少量含む。
2c	2.5Y4/2 暗灰黄	シルト質粘土	礫を上面に含む。
2c′	2.5Y4/2 暗灰黄	シルト質粘土	10YR6/3にぶい黄橙粘土質シルトを粒状に少量含む。
3a	10YR5/2 灰黄褐	シルト質粘土	10YR7/2にぶい黄橙シルト質粘土を粒状に少量含む。
3b	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	10YR7/2にぶい黄橙シルトを粒状に少量含む。
3b′	2.5Y3/2 暗褐	粘土質シルト	10YR7/2にぶい黄橙シルトを粒状に少量含む。
3c	2.5Y3/2 暗褐	シルト質粘土	10YR7/2にぶい黄橙シルト質粘土を底面に少量含む。
3c′	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	10YR7/2にぶい黄橙シルト質粘土を粒状に少量含む。
SK-1014			
1	10YR4/2 灰黄褐	粘土	10YR6/3にぶい黄橙粘土を少ブロック状に少量含む。
2	2.5Y4/1 黄灰	粘土	10YR5/3にぶい黄褐粘土をブロック状に含む。一部グライ化している。
3	2.5Y5/1 黄灰	粘土	植物遺体を少量含む。一部グライ化している。
SK 1015			
1	10YR4/2 灰黄褐	シルト質粘土	
2	2.5Y3/2 黒褐	粘土	2.5Y7/3浅黄粘土をブロック状に少量含み，植物遺体を底面に多量に含む。
SX-1016			
1	10YR4/4 褐	シルト	10YR3/2黒褐色シルトを全体に斑点状に含む。
2	10Y3/3 暗褐	シルト	10YR3/2黒褐色シルトを全体に斑点状に含む。
3a	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	
3b	10YR4/1 褐灰	粘土質シルト	10YR7/4にぶい黄橙粘土質シルトをブロック状に含み，10YR3/2黒褐色粘土質シルトを斑点状に含む。



番号	登録番号	種別	器形	出土遺構	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	C-625	土師器	把手	SD1012		ヘラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ 黒色処理		ヘラミガキ 黒色処理						把手部のみ	4－9
2		土師器	坏	SD1013	1層	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ 黒色処理			14.5cm		1/5	
3		須恵器	高台付坏	SX1016	1層		ロクロナデ	回転ヘラ削り		ロクロナデ	ロクロナデ			11.0cm	底部の1/5	4－1
4	P 17	土製品		SD1012	2層		ヘラナデ？									4－8
5		陶器	手焙り	SX1016	1層	ロクロナデ 波状貼付文	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ナデ		15cm？	24.8cm	21.6cm？	1/10	4－7



番号	登録番号	種別	器種	出土遺構	層位	特徴		写真図版
						凸面	凹面	
6		瓦	平瓦	SD1013	トレンチ北壁	縄叩き目，ナデ	布目，幅3cmの模骨痕	図版6－3
7		瓦	平瓦	SD1013	1層	縄叩き目，ナデ	布目，幅3cmの模骨痕	6－4
8		瓦	丸瓦	SD1013	3層	縄叩き目，炭素付着	布目，擦痕	6－1
9		瓦	丸瓦	SD1013	2層	縄叩き目，ナデ	布目	6－2

第5図　出土遺物実測図

考えられるが、銹化が著しくその詳細は不明である。土製品P—17（第5図4）は円筒形の棒状の破片で、接合部付近に径2～3㎜程の棒状工具の圧痕がみられる。

ＳＸ1016性格不明遺構　堆積土中から土師器坏・甕・須恵器坏・高台付坏・甕、瓦、陶器・埦・鉢・手焙り、磁器、杭、鉄製品、弥生器片？　を出土している。須恵器高台付坏（第5図3）は、底部から体部下半の破片で、幅の狭い外傾する高台である。瓦片の中には燻し瓦の破片も含まれている。陶器手焙り（第5図5）は口縁部と底部の破片で、口縁部外面に波状の貼付文がみられる。体部外面に縄文を施した小破片3点（図版4—5・6）を出土しており、弥生土器と考えられる。

遺構以外からの出土遺物には、土師器、須恵器、瓦、陶器、磁器、石製品を出土している。石製品には砥石や、直径2㎝の碁石？　を1点ずつ含んでいる。

7．まとめ

今回の調査で検出した遺構のうち、ＳＸ1016性格不明遺構は近世以降の遺物を出土し、木杭の存在、地形の段差部分の遺構であることなどから考えあわせ、旧河道もしくは水路と考えられる。

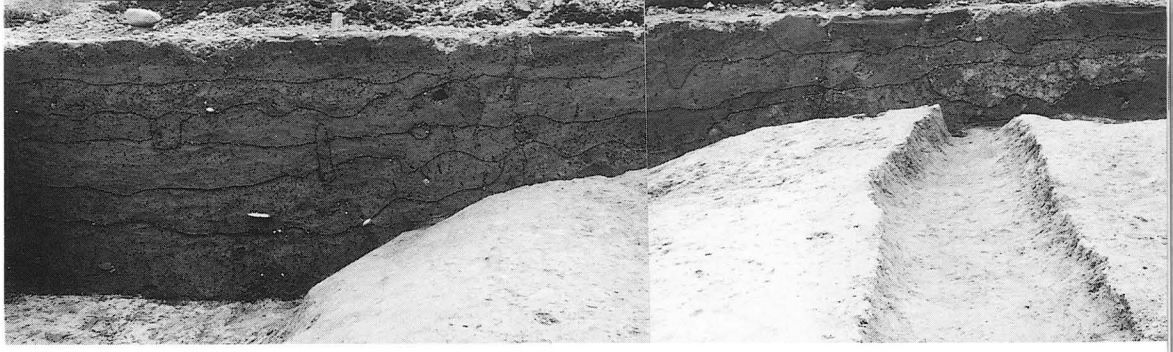
Ⅲ層上面で検出したＳＤ1013溝跡は、推定方二町寺域外郭線の東辺の南延長線にあたり、その方向からみても何らかの区画施設である可能性もあるが、検出上面での上幅に変化があること、底面レベルに高低があることから、導水施設の可能性が強い。また出土遺物に瓦やロクロ使用の土師器坏があって、官衙廃絶後の遺構と考えたい。

当調査区においては、郡山遺跡の官衙に直接的に関係すると断定しうる遺構の検出はみなかったが、Ⅱ期官衙期に属すると考えられる出土遺物も混在しており、調査区の近辺には官衙に関連する遺構が存在しているものと推定できる。

また、今回は遺構の検出は出来なかったが、弥生土器もしくは縄文土器と考えられる破片を3点出土しており、古代以前の遺構面の存在も予測でき、今後の調査結果を期待したい。

▲ 遺構検出状況

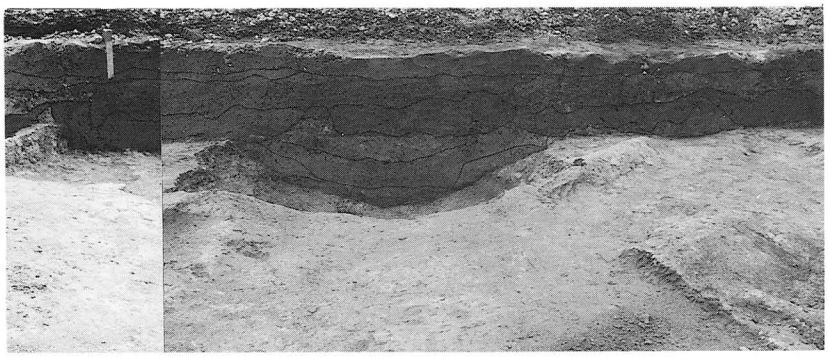
◀ 完掘状況



▲ 東側

調査区南壁セクション

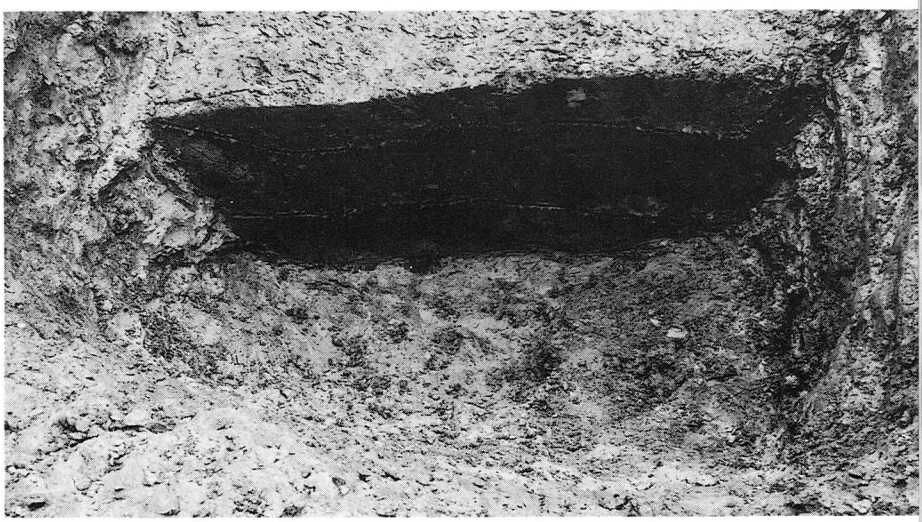
西側 ▶



調査区東壁セクション ▶

SK－1014セクション ▶

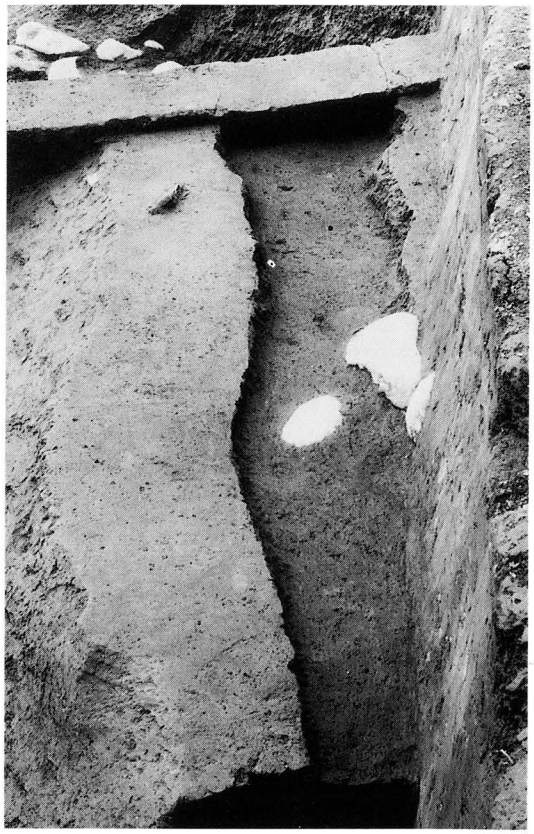
（南より）



▲ ＳＤ－1012・1013ベルトセクション

▼ ＳＫ－1014・1015完掘状況

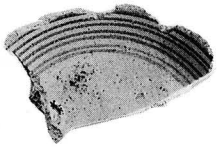
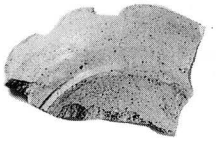
▼ ＳＤ－1012完掘状況



1

2

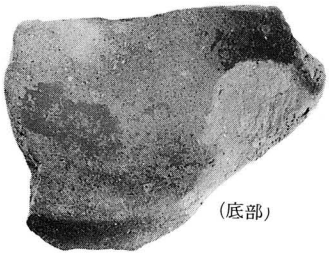
3

4

5

(口縁部)



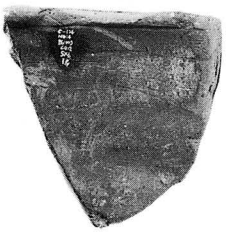
(底部)

7(表面)

6

8

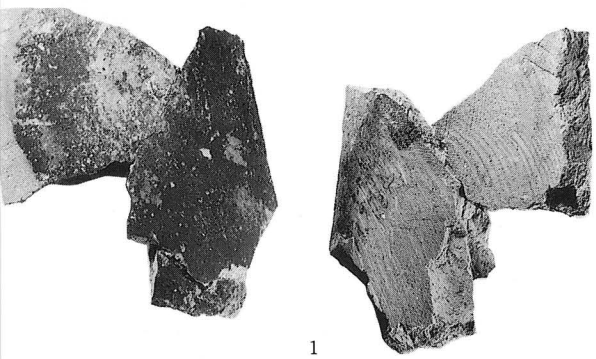
9



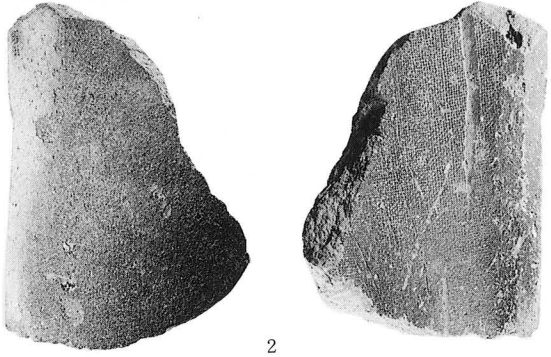
7(裏面)

番　号	登録番号	種　　別	出土遺構	出土層位	実　測　図
1		須恵器高台付坏	SX1016	1層	第5図3
2		須恵器坏	SD1013	1層	
3	J－5	青磁皿	SD1013	2層	
4		陶器皿	撹乱		
5		弥生土器？	SX1016	1層	
6		弥生土器？	SX1016		
7		陶器手焙り	SX1016	1層	第5図5
8	P－17	土製品	SD1012	2層	第5図4
9	C－625	土師器	SD1012		第5図1

出　土　遺　物

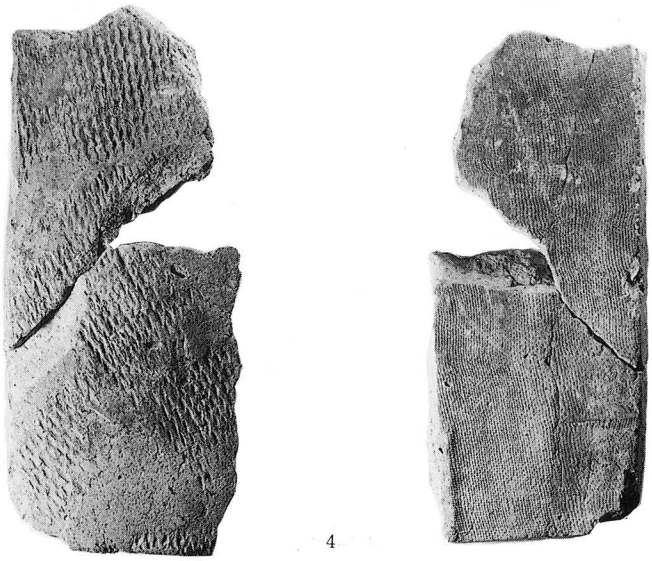


1



2

3

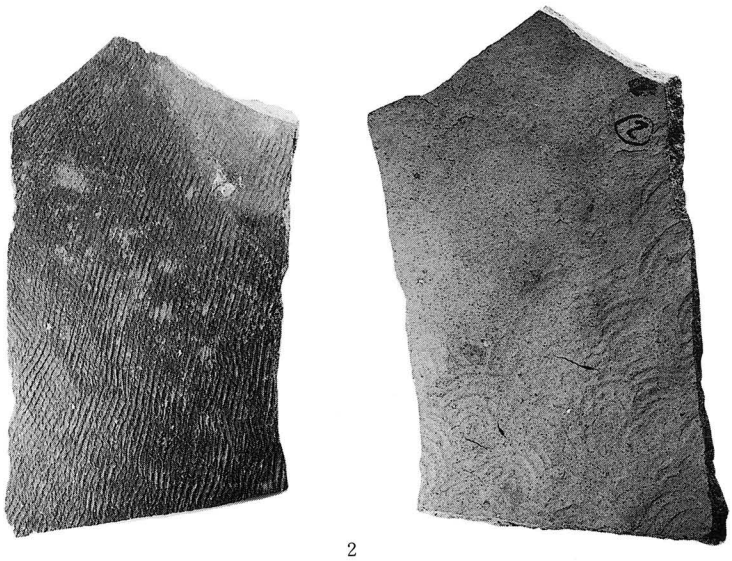


4

番　号	登録番号	種　　別	出土遺構	出土層位	実　測　図
1		丸瓦	SD1013	3層	第5図8
2		丸瓦	SD1013	2層	第5図9
3		平瓦	SD1013	トレンチ北壁	第5図6
4		平瓦	SD1013	1層	第5図7

出　土　遺　物

1



2

3

番　号	登録番号	種　　別	出土遺構	出土層位	実　測　図
1		須恵器　甕		耕作土	
2		須恵器　甕		耕作土	
3		砥石	撹乱		

出　土　遺　物

2．今市遺跡試掘調査

場　　所　仙台市岩切字三所北28―1

原　　因　宅地造成

開発面積　約3,600㎡

申 請 者　武山興産（株）仙台支店

開発行為事前協議申請　昭和61年2月10日

〃　　成立　昭和61年2月21日

試掘年月日　昭和61年2月26日・3月3日

発掘届提出　昭和61年3月4日

試掘面積　約130㎡

仙台市岩切の七北田川（冠川）周辺の発展のようすは、留守家文書に「冠屋市場」「五日市場」「在家」等の記載がみられ、鎌倉時代の末には定期的に市が開かれており、活発な商業活動が行われたことが推定できる。当然周囲には中世集落が形成されていたであろう。今市遺跡は七北田川南岸にあり、前記に関連する中世遺構が存在するであろうと考えられている遺跡の一つである。

開発予定地の現況は水田であり、標高は約9.2mである。地権者等の話を総合すると、5、60年前に畑地だったところを切土して、すぐ南側にある岩切小学校や中学校敷地造成の際に沼地だったので埋土として使用したとのことであった。また当開発地の南半分も沼地の北端にかかっていたとのことであった。

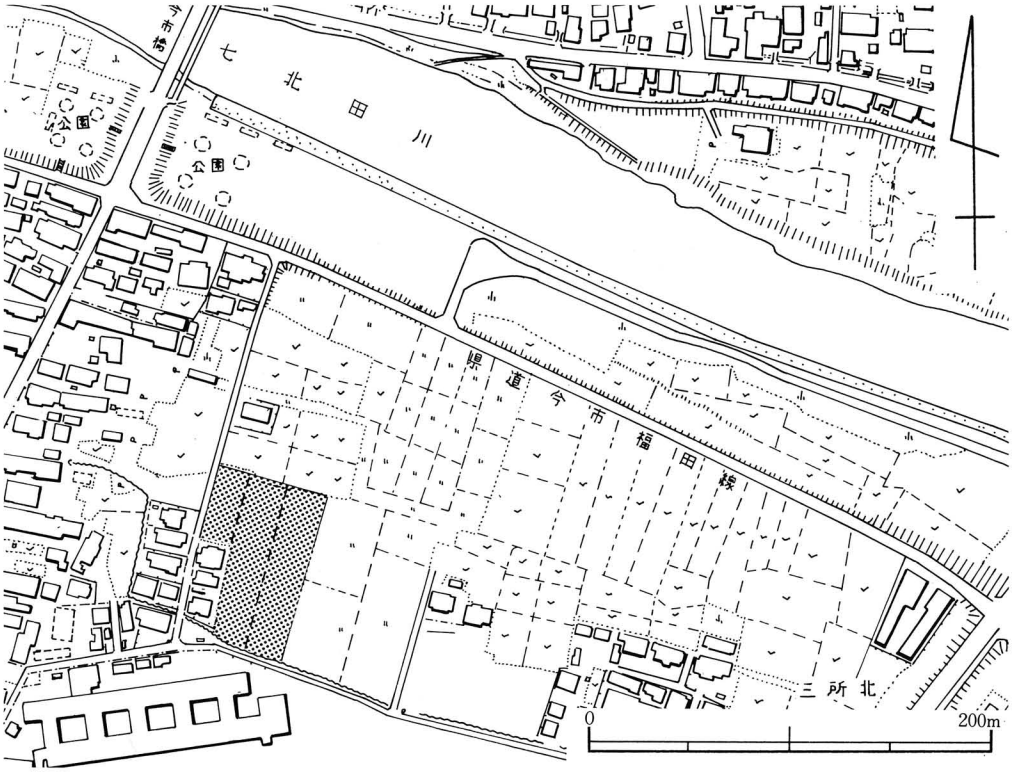
試掘トレンチは、造成計画の道路部分となるところに幅約3mで入れたが、地権者等の話のとおり旧表土は残存しておらず、開発予定地中間より南の方は徐々に傾斜していくと同時に、ベタベタしてグライ化した土質にかわっていっている。

発見遺構

発見した遺構はトレンチ北端の方で井戸跡1基である。この井戸跡が検出される面はGLより30cm下がったところで、現水田を含めて、切土後に整地のため入れた土を排除することで検出された。

井戸跡は上端直径約1.6m、下端直径約1.2m、深さ約1.6mの素掘りのものである。ほぼ90cm以下の堆積土はグライ化している。

堆積土は大きく三つに分けられ、これはまた10に細分できた。遺物の取り上げは、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの大別層によった。層位は第3図のとおりである。



第1図　調査対象区と周辺

遺物の出土はⅠ、Ⅱ層に多く、陶器片、土師質土器片は全てこれらの層である。また椀、曲物はⅡ層出土である。その他若干数、Ⅲ層（井戸底面）から木の枝や曲物片が出土している。

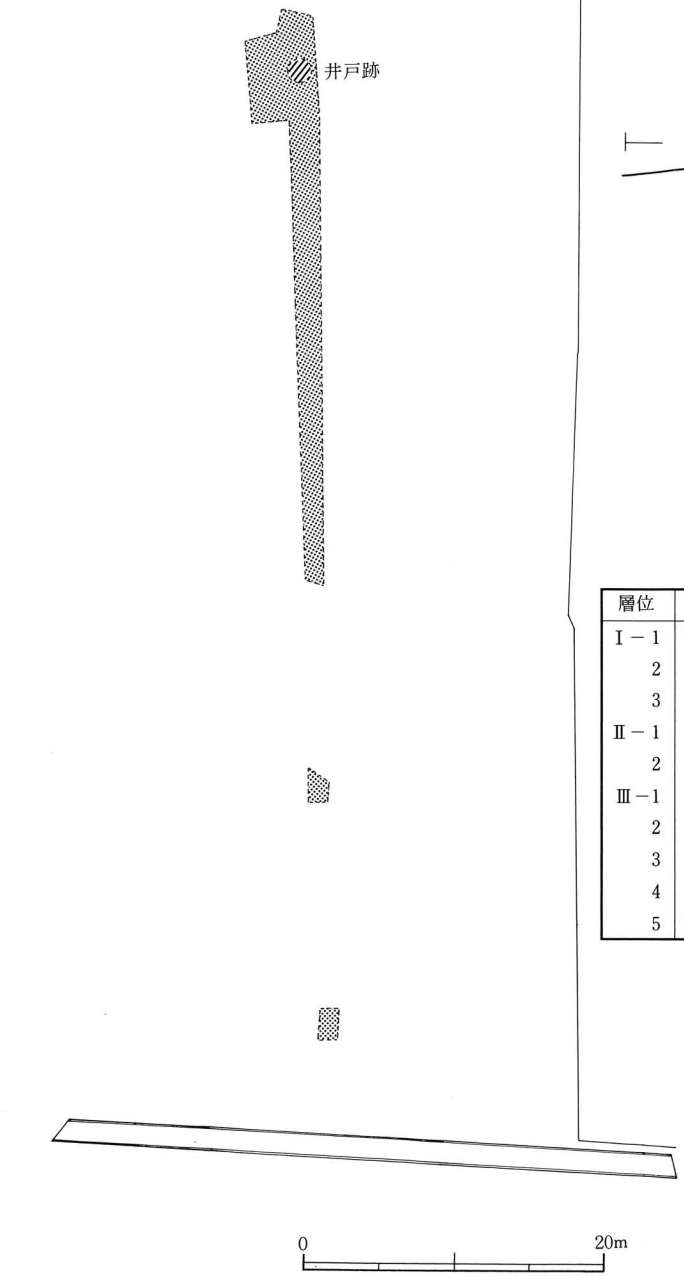
出土遺物

遺物の出土は井戸からのみである。種類は陶器と土師質土器と木製品である。これらの多くは、基本層位のところでもふれたが、Ⅰ・Ⅱ層に集中し、井戸底面つまりⅢ層下面からは木製品の曲物片が若干である。

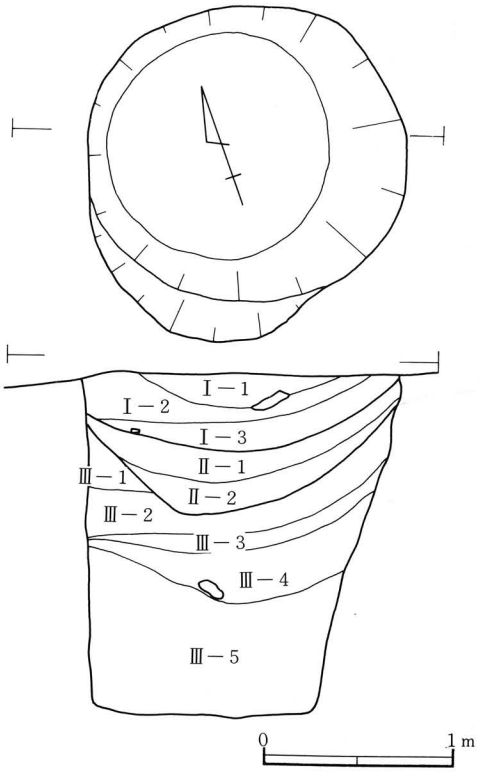
陶器は全点破片である。壺、擂鉢、甕、瓶子と見られるものである。第4図4の甕は受口状の口縁部をもつものであり、外面に焼成時の灰が付着している。14世紀に多い口縁部形態である。生産地は県内と思われる。第4図6は折り返し口縁を呈する甕の破片である。この形態のものは15世紀初期に年代設定できるであろう。常滑産のものである。第4図8の甕底部も常滑の製品で、色調、胎土とも前者に類似し、同一個体ではないかと考えられる。その他、図示できなかったが、瀬戸の灰釉の瓶子や県内産と思われる擂鉢がある。

土師質土器片は坏か小皿の破片で、内面に若干カーボンを残すものもある。

木製品は桶と椀である。第4図1は曲物の桶である。側板の高さは12.2cmで、底板の直径は20.8cmである。側板は桜の皮で綴じられている。第4図3は椀であり、高台内を除きロクロ挽

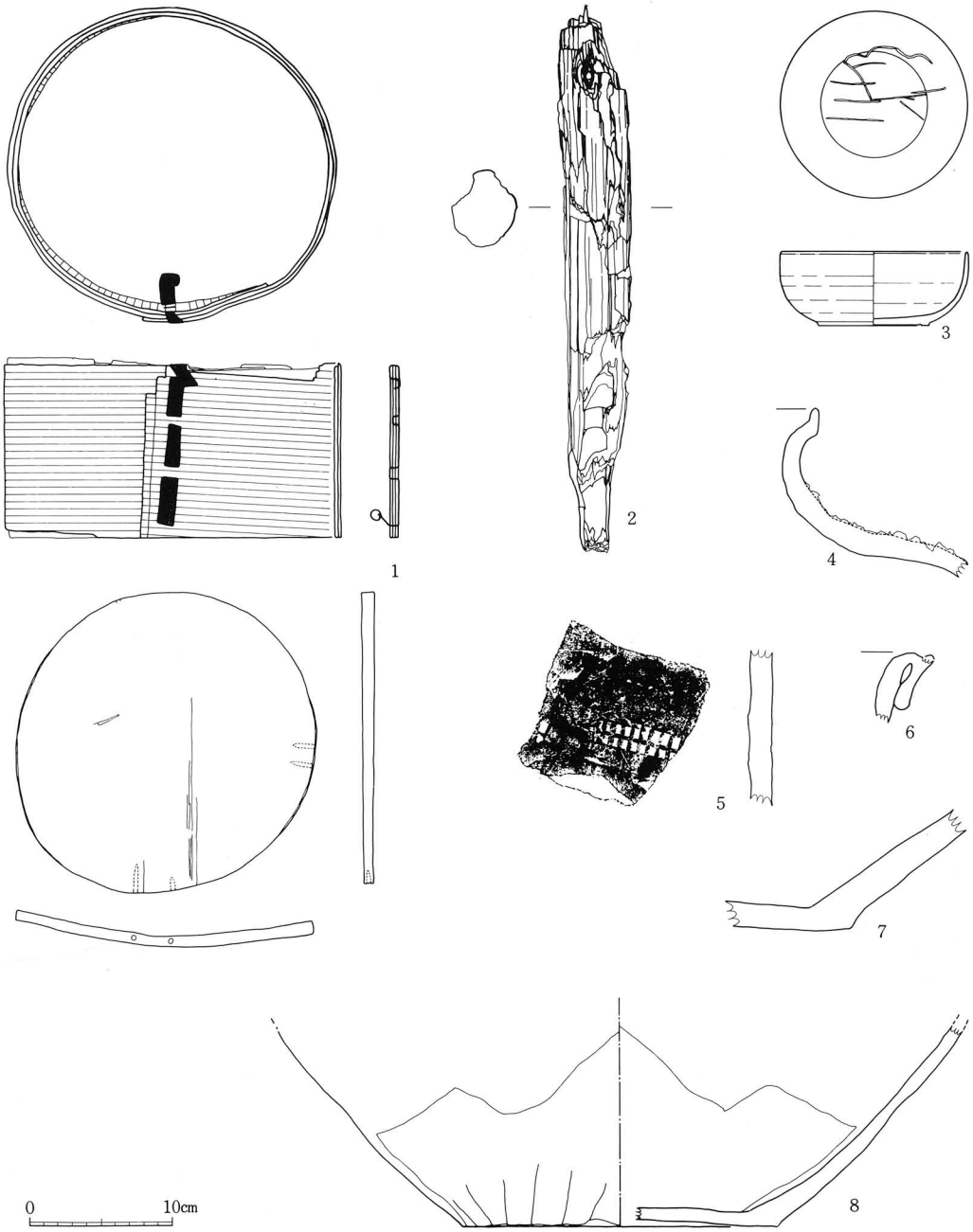


第2図　試掘トレンチの位置



層位	土　　色	土　性
Ⅰ－1	7.5YR　3/1　黒褐色	粘土質シルト
2	10YR　3/3　暗褐色	粘土質シルト
3	10Y　3/4　暗褐色	粘土質シルト
Ⅱ－1	10YR　3/3　暗褐色	砂質シルト
2	10YR　3/4　暗褐色	砂質シルト
Ⅲ－1	10YR　6/6　明黄褐色	シルト
2	5Y　3/2　オリーブ黒色	シルト
3	5Y　2/2　オリーブ黒色	シルト
4	5Y　2/2　オリーブ黒色	粘土質シルト
5	7.5Y　5/3　灰オリーブ色	砂質シルト

第3図　井戸跡の平・断面図



1．桶　　2．杭　　3．椀　　4．甕

5．甕　　6．甕　　7．甕　　8．甕

第4図　出土遺物実測図

きされている、極めて中世的特徴が観察されるものである。その他、第4図2に示したような杭の破片も若干出土した。

ま と め

今回の調査地点より南側は旧河道が東西にはしり、湿地として所々に残っていたことが推定されたとこであるが、とするとこの周辺での遺跡の広がりは七北田川に平行するものと考えられる。

ところで発見された井戸の年代であるが、出土遺物が14～15世紀初期のものであること、井戸のⅠ・Ⅱ層に集中的に投棄されたような状態で出土したこと、井戸は素掘りで、地山は砂質シルトであるので、さほど長く使用されたとは考えにくいことから、南北朝期に造られたものと考えた方が妥当であろう。

また年代観の違う陶器が一括出土したことは、長期使用されて新旧一括投棄されたものか、ある時期に共通して生産されていたものか、今後の検討課題としたい。

3．富沢遺跡発掘調査

1．遺跡の位置と環境

遺跡番号	遺跡名称	所　属　時　期	遺跡番号	遺跡名称	所　属　時　期
C-301	富沢遺跡	縄文～近世	C-233	山口遺跡	縄文（早～晩）弥生～中世
C-107	芦ノ口遺跡	平安	C-300	下ノ内浦遺跡	縄文(早•前•後)・弥生～中世
C-203	砂押屋敷遺跡	平安	C-267	元袋Ⅲ遺跡	奈良・平安
C-301	土手内横穴群	奈良・平安	C-197	六反田遺跡	縄文(中•後•晩)・弥生～平安
C-106	三神峯遺跡	縄文（早・前・中）	C-112	大野田遺跡	縄文（後）・奈良・平安
C-017	金岡八幡古墳	古墳	C-299	下ノ内遺跡	縄文（中・後）・弥生～平安
C-007	砂押古墳	古墳	C-196	伊古田遺跡	縄文（後）・古墳～平安
C-015	金洗沢古墳	古墳	C-039	春日社古墳	古墳
C-008	裏町古墳	古墳	C-038	王ノ壇古墳	古墳
C-195	富沢上ノ台遺跡	奈良・平安	C-043	鳥居塚古墳	古墳
C-014	教塚古墳	古墳	C-520	富沢館跡	奈良・平安・中世
C-202	泉崎浦遺跡	縄文（後）・古墳～平安	C-151	六本松遺跡	奈良・平安

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

富沢遺跡（仙台市文化財登録番号C—301）は国鉄長町駅の西方、仙台市長町七丁目、長町南一・三・四丁目、泉崎一・二丁目、鹿野三丁目、富沢一丁目に所在している。当地域は地理学上「郡山低地」と呼ばれ、名取川・広瀬川及びその支流が形成した自然堤防・後背湿地が発達し広がっている。当遺跡はこの郡山低地の西半部に位置し、標高は9～16cm前後、面積は約80万㎡を有する。土地区画整理事業以前は自然堤防上に集落が点在し、他は一面の水田地帯であった当地域も近年宅地化が進み公共施設建設・商業地域の発展拡大に伴い景観も変貌しつつある。現況では元の地形を把握することは不可能となり、事業以前の地形図や航空写真で知られるのみとなっている。

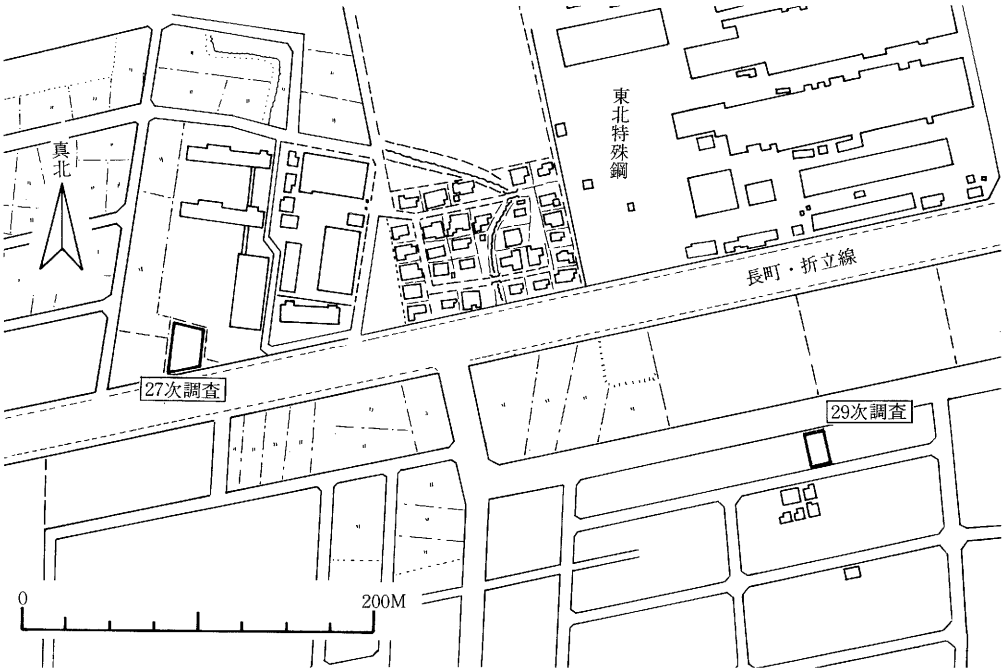
富沢遺跡を発見する契機となったものは、昭和56年に実施された仙台市体育館建設に伴う山口遺跡の調査であった。調査区北半部の後背湿地で平安時代の水田跡を検出したことに始まる。この調査成果を踏まえ仙台市高速鉄道関係遺跡等の調査において、中世から弥生時代にまでわたる重層構造を成す水田遺構が確認されていった。この時点では富沢水田遺跡と呼称していたが、検出される遺構が水田跡のみならず館跡に関連する堀跡・縄文時代の早～前期の石器層等と多岐にわたるため富沢遺跡と改称している。

この郡山低地を含め当遺跡周辺には数多くの遺跡が分布している。北西部に位置する丘陵上には縄文時代前期の住居跡が発見された三神峯遺跡、埴輪生産遺跡の富沢窯跡、丘陵裾部には裏町（前方後円墳）・砂押・金洗沢古墳が点在している。低地に位置する遺跡の多くは重層構造を成しており、中世から縄文時代の遺構・遺物が確認されている。下ノ内浦遺跡では縄文時代早期の押型文土器、弥生時代の土坑・竪穴遺構・炭化米・石包丁等が検出され、下ノ内遺跡では縄文時代中期の住居跡が、六反田遺跡では後期の住居跡・石組み遺構が、伊古田遺跡では後期の遺物包含層から大形の土偶が検出されている。上述の遺跡では平安・奈良・古墳時代の住居跡等の遺構も多く検出されている。また、低地南東部には五反田・春日社・鳥居塚・王ノ壇と古墳が点在し大野田古墳群を形成し、埋没古墳も多く存在していると考えられている。中世としては富沢館跡がみられ、現在でも方形の堀割が観察される。このように当地域には縄文時代から中世にわたる遺跡群がみられ各時代毎における生活様相が推察されるが、特に弥生時代以後の遺構（集落跡）と水田遺構の有機的な結びつきを考えうる地域として貴重である。

2．第27次調査（中谷地地区）

(1) はじめに

当地点は仙台市鹿野三丁目226にあたり、富沢遺跡中央部北側に位置する。地権者　佐藤新治郎氏より昭和60年10月16日付で共同住宅建設に伴う発掘届が提出された。建物基礎が地下遺構を破壊することが予想されたため、地権者との協議を行い事前の調査を実施することとなっ



第2図　調査区位置図

た。当地点南側隣接地の調査で平安時代及びそれ以前の水田跡が検出されており、同様の遺構の存在が予想され、昭和61年7月28日より調査を開始した。

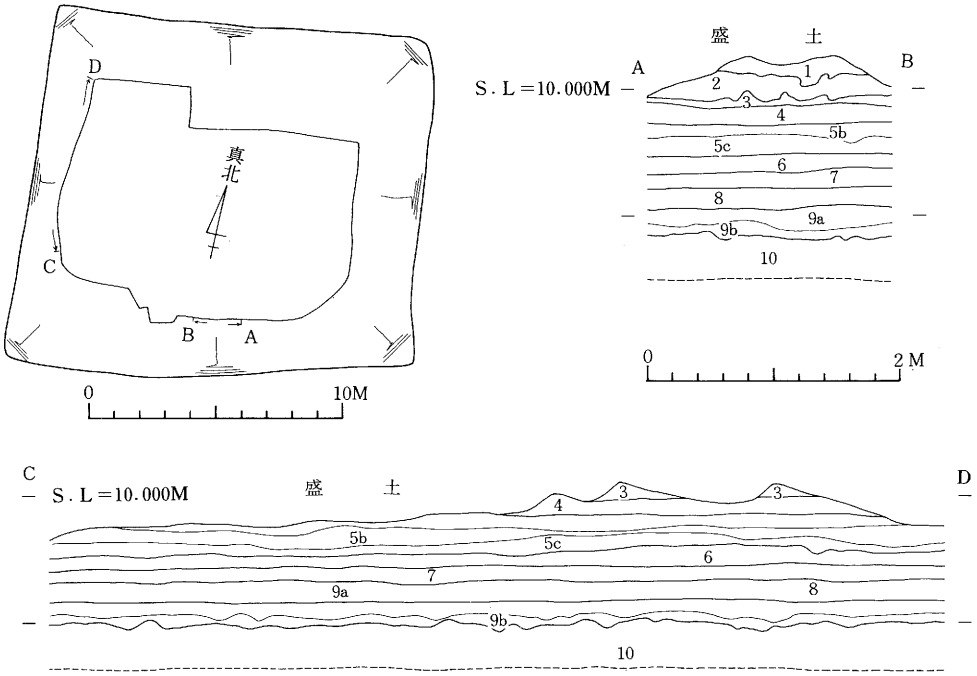
調査区は建物基礎間の幅をとり上端で16×14mのトレンチを設定したが、盛土が厚く崩落の危険性を考慮し壁に勾配をもたせたため調査面は11×8m程となっている。盛土は重機で排除していったが盛土以前に旧水田面が攪乱をうけており、盛土と攪乱層の厚さが約2.5mを計るなど遺存状況は不良であった。

(2)　基本層位

先述した様に上部の層が攪乱を受け旧水田層等が消滅しているが大別で10層まで確認している。全体的に粘土質シルトの土壌であるが、下部においては砂質シルトとなっている。1～3層は部分的に確認されたのみであるが、1・2層は他の層に比べて層理面が乱れており人為的作用が考えられ、水田土壌と認定出来るものと考えられる。なお、2層中には灰白色火山灰がブロック状に含まれている。3～7層はスクモ層で、8～9層は上層に比べて植物遺体の分解が進んでいる。10層はグライ土壌となっている。

(3)　ま　と　め

今回の調査では攪乱等の制約から面的な遺構の確認は出来なかったが、基本層の1・2層は水田土壌と考えられ水田遺構が存在していたと考えられる。時期は遺物の出土もなく断定し得ないが、2層中に灰白色火山灰が認められることから平安時代以降と把えておきたい。また、縄文時代の土器・石器層の確認のため10層まで掘り下げを行ったが確認出来なかった。



層位	土　　色	土　性	備　　考
1	灰色（5Y4/1）	粘土質シルト	酸化鉄粒をまだらに含み，砂粒もみられる
2	オリーブ黒色（5Y3/1）	〃	酸化鉄粒を少量含む。灰白色火山灰をブロック状に含み，3層が若干混じる。
3	黒褐色（10YR3/2）	〃	スクモ層　植物質堆積物と黒褐色土の互層
4	黒色（10YR1.7/1）	〃	〃　4～6層は互層
5a	黒褐色（10YR2/2）	〃	〃　植物質堆積物の量で若干色調が変化，下部にかけて明るくなる。
5b	黒褐色（10YR2/2）	〃	〃
5c	黒褐色（10YR2/2）	〃	〃
6	黒褐色（10YR3/2）	〃	〃　3～5層に比べ植物質堆積物の量が多い。
7	黒褐色（10YR3/1）	〃	〃　3～6層に比べ分解が進んでいる。
8	黒色（10YR1.7/1）	〃	〃　〃
9a	黒色（10YR2/1）	〃	〃　〃
9b	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト	〃
10	灰色（5Y5/1）	〃	グライ層　9b層がブロックで混じる。

第3図　第27次調査区平面及び断面図

3．第29次調査（鍋田地区）

(1) はじめに

当地点は仙台市長町南三丁目3－172にあたり、遺跡中央部東側に位置する。ビル建設工事に伴う発掘届が、地権者　高橋和氏より昭和60年12月2日付で提出された。建築工法が地下遺構を損うことが予想されたため、協議の結果事前の調査を実施するに至った。当地点北側では総合支所建設に伴う発掘調査が行われており、平安時代等の水田遺構が検出されていた。当地点でも同様の遺構の存在が考えられ、昭和61年11月10日より調査を開始した。

調査区は建物基礎部間の幅で設定したが盛土の厚さ等を考慮し東西6.9×南北13.8m程となっている。盛土は2.0m程であったが若干旧水田層に影響がみられたのみで遺存状況は良好で

あった。最終的に当地点においても縄文時代の土器・石器層確認のため深掘りを行っている。

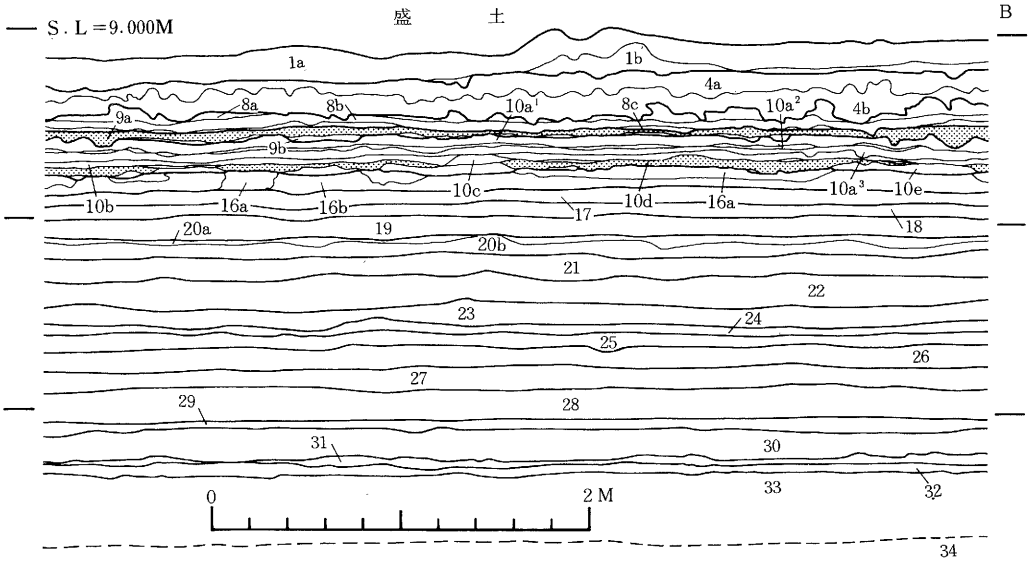
(2) 基本層位

当地点は道路をはさんで総合支所発掘調査区と面しており共通する層の存在が予想され、検討の結果、上部の層位に共通するものが認められた。そのため上部の層は共通の名称を使用することとしたため、層序は通し番号となっていない。1層から10層までが共通名称で、16層以下が当地点独自の層位番号となっている。

基本層位は大別して23層、細別で34層確認している。全体的に粘土質の土壌であるが16層以下は純然たるスクモ層となっており、最下部において砂質土壌を確認している。

(3) 発見遺構と出土遺物

1) 9a 層上面検出水田跡



層位	土色	土性	備考
1a	褐灰（10YR4/1）	シルト	旧水田土壌
1b	灰黄褐（10YR4/2）	〃	下部に酸化鉄粒
4a	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	土器片，木片，炭白色火山灰を含む
4b	黒褐（10YR3/2）	〃	灰黄褐色土をブロックに含む，木片を含む
8a	灰黄褐（10YR6/2）	〃	
8b	黒（10YR1.7/1）	〃	
8c	灰黄褐（10YR4/2）	〃	炭化物粒をまだらに含む
9a	にぶい黄褐（10YR5/3）	〃	水田作土
9b	黒褐（10YR3/2）	〃	炭化物を含む
10a¹	暗褐（10YR3/3）	〃	スクモ
10a²	褐（10YR4/4）	〃	
10a³	黒（10YR1.7/1）	〃	
10b	黄灰（10YR4/1）	〃	
10c	黒褐（10YR3/1）	〃	
10d	灰黄褐（10YR4/2）	〃	水田作土
10e	灰黄褐（10YR4/1）	〃	
16a	黒褐（10YR3/1）	〃	スクモ　種子（クルミ）
16b	黒褐（10YR2/2）	〃	〃　灰黄褐色土と互層になる部分有り
17	黒（10YR1.7/1）	粘土質シルト	スクモ
18	黒褐（10YR3/2）	〃	〃
19	黒褐（10YR2/2）	〃	〃
20a	灰黄褐（10YR4/2）	〃	〃
20b	黒褐（10YR3/2）	〃	〃
21	黒褐（10YR3/1）	〃	〃　うすく黄褐色土を含む
22	にぶい黄褐（10YR4/3）	〃	〃
23	黒（10YR1.7/1）	〃	〃
24	にぶい黄橙（10YR7/2）	〃	〃
25	灰黄褐（10YR5/2）	〃	〃
26	灰黄褐（10YR4/2）	〃	〃
27	黒褐（10YR2/3）	〃	〃
28	黒（10YR1.7/1）	〃	〃
29	灰黄褐（10YR6/2）	〃	〃
30	黒（10YR1.7/1）	〃	〃
31	灰黄褐（10YR5/2）	〃	〃
32	黒（10YR2/1）	〃	〃
33	黒（10YR1.7/1）	〃	〃
34	にぶい黄褐（10YR5/4）	粘土質，細砂	

第4図　第29次調査区基本層位

8c 層精査作業時点で調査区を斜めに延びる土層（9a 層）を確認し、更に精査を進めた結果、T字形に交わる盛り上がりを確認した。検討の結果、二条の畦畔跡と考えられ水田跡と判断した。畦畔は土盛りによるもので、方向はA—A’でN—52°—W、B—B’でN—43°—E偏する。規模は上端幅で20cm前後、下端幅で50cm前後を計る。作土上面からの高さは最大で4cm程である。調査範囲が狭いため個々の水田面の特徴は明らかに出来なかったが、全体的に調査区北側から南西側にかけて水田面が低く（比高差15cm前後）なっている。遺物は出土していない。所属年代は後述する点から弥生時代の十三塚式期に比定される。

2） 10d 層上面検出水田跡

方形を基調とする不整形な小区画の一群と方形を有する大きめな区画のものを確認した。区画は土盛りよるものと考えられ水田跡と判断した。小区画の水田跡は上部層の影響のためか全体的に遺存状況が不良で本来の形を有しないものも存在すると考えられるが、畦畔幅は上端で40cm、下端で50cm前後を計るものが多い。作土上面からの高さは1cm程である。区画の規模は畦畔下端間で計ると、小さなもので70×100cm程、大きなもので180×270cm程を計る。畦畔方向はN—30°～38°—E偏している。大形の区画のものは小区画水田跡とは遺存状態が異なるもので、西側と南側の畦畔状に延びる盛り上がりは10d 層による構築であるが、内側は10d 層と10e 層の混合の土壌となっており平坦となっている。そのため片側のみに下がりがみられ、内側は土壌の相違で上端が確認される。上端幅は20～40cm程で方向は長辺でN—30°—E偏している。遺物として小区画の水田跡作土上面で竪杵を一本検出している。長さは約110cmを計り、中央部に突起を一ヶ有している。所属年代は後述の点から弥生時代の十三塚式期～桝形囲式期の間に比定される。

3） 4b 層検出遺構

溝2条、土坑1基を検出し、層上面及び層中において木片も多数出土している。溝は部分的に検出したもので二条ほぼ平行している。やや屈曲をみるが方向はN—53°～66°—E偏している。上幅は北側の溝が30cm程、南側の溝が20cm程である。深さは両者とも2cm程である。断面は皿状を呈する。埋土は単層で遺物は出土していない。土坑は歪んだ楕円形を呈するもので、長軸で70cm、短軸で58cm、深さは12cm程、断面形は皿状を呈する。埋土は4b層が入り込んでおり自然堆積層と考えられる。遺物は出土していない。

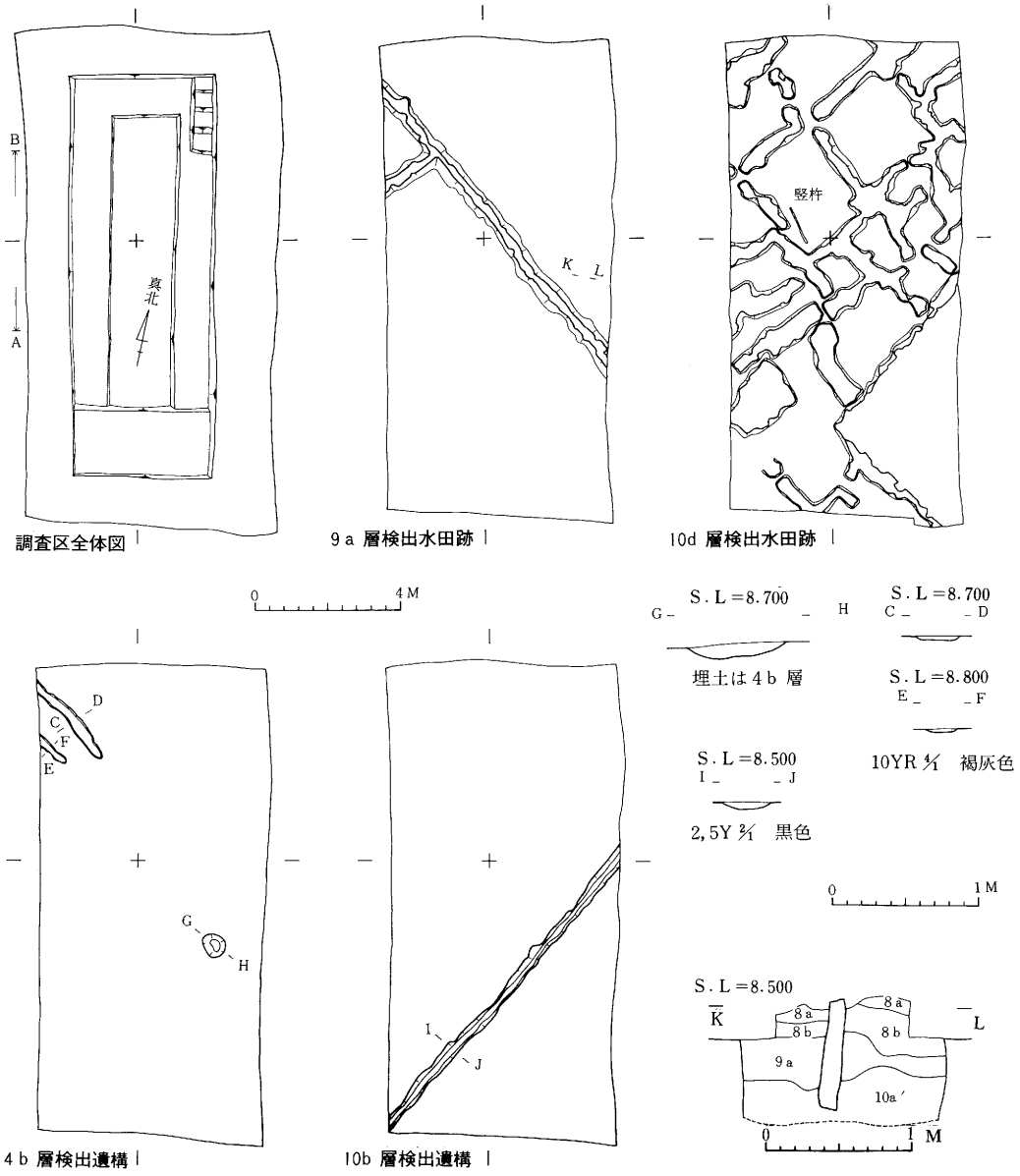
4） 10b 層検出遺構

溝を1条確認している。調査区を斜めに直線的に延びるもので、方向はN—29°—E偏している。上幅は30～40cm程、底面幅は10～14cm程、深さは5cm程を計る。断面はややロの開いたU字状を呈する。埋土は単層で、遺物は出土していない。

5） そ の 他

4a 層検出水田土壌：畦畔等が確認されず水田跡とは認定し得なかったが、層中・層理面の状況から水田作土と考えられた。作土上面及び作土中より灰白色火山灰がまだらにみられ、木片及び土師器片・須恵器片が出土している。作土面は調査区北側から南側にかけて低くなっており比高差は10cm前後である。所属年代は出土遺物や灰白色火山灰の存在等からみて平安時代の前半頃と大きくみておきたい。

8b層検出杭：一本のみの検出で性格や打ち込み面は判断し得なかった。小さな丸材で径2.4



調査区全体図

9a 層検出水田跡

10d 層検出水田跡

4b 層検出遺構

10b 層検出遺構

第5図　各遺構平面・断面図

～2.9cm、残存長15.2cmを計る。上端部と先端部は欠損及び崩れがみられ加工痕などは確認できなかった。

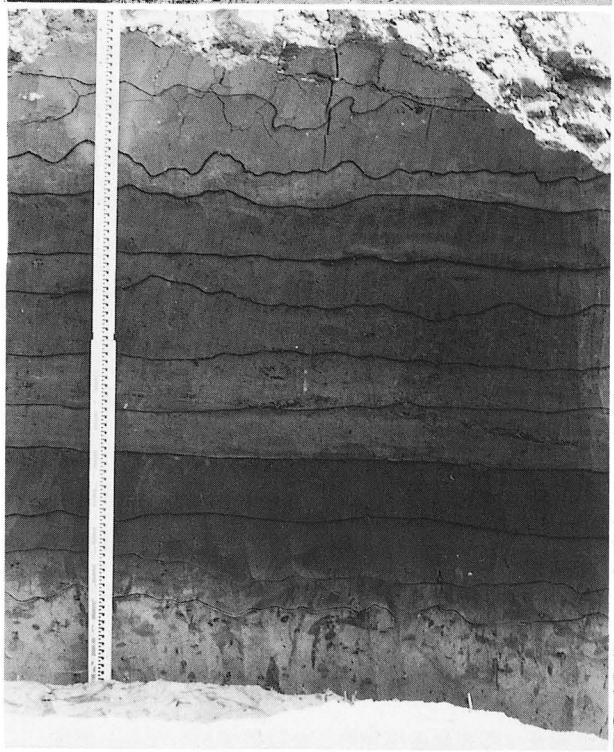
(4) ま と め

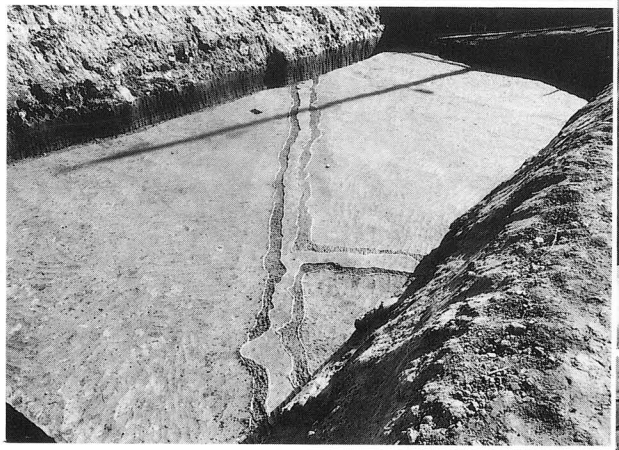
弥生時代の水田遺構を2面確認した。時期として十三塚式期のものと十三塚式期～桝形囲式期の間に比定されるものである。なお、後者の作土上面において竪杵が一本出土している。

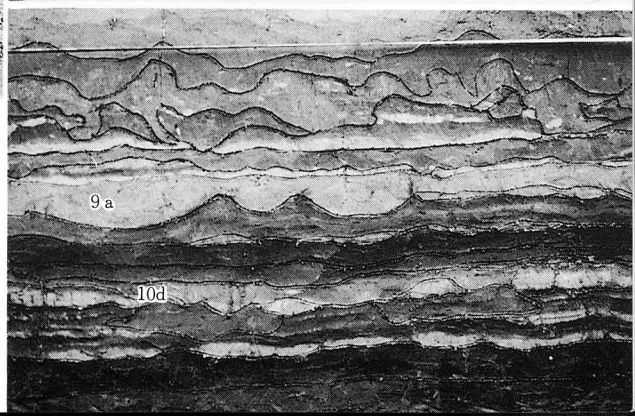
各層における畦畔及び溝の延びる方向に規則的なものが考えられる。調査面も狭く地形的要因も考えられるが留意される。

水田跡の所属時期は時期の確定している地点の層位（仙台市高速鉄道関係遺跡調査・都市計画街路長町折立線地内調査）との検討において求められている。

当調査成果の詳細は第28次調査（総合支所建設地内調査）に収録予定である。







27次調査区全景

基本位層

29次調査
9a 層上面検出水田跡

29次調査
10a 層上面検出水田跡

深掘り状況

基本層位

4．燕沢遺跡出土の軒丸瓦（資料紹介）

1．はじめに

ここに紹介する瓦は、現在仙台市岩切公民館に保管されているもので、単弁四葉蓮華文軒丸瓦である。遺跡南側の緩斜面の畑地から採集したと言われており、出土状況等が不明ではあるがほぼ完形を保っている。取り分け瓦当面の意匠は新知見となるもので当遺跡を考える上での好資料と思われる。なお、軒丸瓦の他に平瓦が二枚保管されているが一括品であるのか詳細は不明であった。

2．軒丸瓦について

瓦当部外区の一部と丸瓦部の狭端部が欠損しているが細部の特徴は充分観察出来る。色調は灰色を呈し、胎土に砂粒が若干含まれるが瓦質は緻密で硬質である。残存長は35.7cmを計る。

瓦当部：四葉の単弁蓮華文で直径14.3cmを計る。外区は平縁で幅0.9cm、中房は円板状で径2.5cm、瓦当の厚さは2.7cmを計る。中房は瓦当面の中でもっとも低く位置し、0.1cm程の厚さをもつ。蓮子は１＋４の構成で中心蓮子・周縁蓮子とも円形で乳頭状に突出する形をもつ。蓮子間に大小の差はないが周辺蓮子がやや低い。中心蓮子と周縁蓮子を結ぶ方向は蓮弁中央部を向いている。蓮弁の平面形は扇状を呈する幅広のもので端部はゆるやかに丸くおさまる。蓮弁は弧をえがく様に反りかえっており、弁中央部がもっとも肉厚になっている。子葉は蓮弁に比べ細みのもので端部が丸みをもつ楔形を呈し、蓮弁の形状に重なるように配されており弁中央部付近が同じく肉厚となっている。断面形は蓮弁ともに厚みのない半円形を呈する。子葉端部から蓮弁端部にかけて隆線が明瞭にみられる。間弁は銀杏形の三角形部と隆線部からなる。三角形部の盛りあがりが特に発達し、他の文様部分に比べ一段と高くなっている。隆線部は左右に延び蓮弁を包みこむ様に巡ぐり間弁へ連なる。圏線が外区と間弁の間に一条みられる。断面は三角形を呈し、高さ0.3～0.4cmを計る。

丸瓦部：粘土板巻き作りによる無段丸瓦（行基式瓦）と考えられる。断面形は半円形を呈する。凸面には平行叩き目痕がみられ、瓦の長軸に対しおおむね縦位方向に走るが、端部では斜位方向も観察される。凹面には布目痕・横位に走る糸切り痕・縦位に走る粘土板合わせ目がみられる。布目は緻密である。側端部には二面の面取りが施こされている。瓦の厚さは1.6cm程を計る。瓦当部との接合は印篭つぎにより接合されていると考えられ、瓦当側面・内側には粘土のつぎたしがみられ、側面にはヘラケズリ・ナデの調整、内側にはナデ調整が観察される。

以上が軒丸瓦の観察結果であるが、特徴を簡略に記すと、全体的に小ぶりで、瓦当部においては４弁であること、圏線をもつこと、丸瓦部では無段（行基式）であること、粘土板作りであることが上げられる。この丸瓦部の特徴は燕沢遺跡出土瓦の分類で丸瓦２類にあてはまるも

ので、今回の新知見で丸瓦２類に付く瓦当が確認されたことになる。

３．おわりに

当遺跡出土の瓦は表面採集・発掘調査により各種類の瓦が確認されている。造瓦技法から大きく二者（平瓦では粘土板桶巻作りと一枚作り・丸瓦では粘土板巻作りと粘土紐作り）に分けられ、瓦当文様・形態・叩き圧痕・調整等から軒丸瓦４種（歯車文・細弁蓮華文・宝相華文・単弁蓮弁文）、軒平瓦１種（均整唐草文）、丸瓦・平瓦が各４種に現在分類が可能となっている。このように絶対数量は少ないが多種にのぼる瓦類が出土しているが、多くは多賀城Ⅲ・Ⅳ期の時期に比定されるものである。この中で丸瓦１・２類、平瓦１・２類としたものは造瓦技法からの検討の結果、多賀城創建期以前・創建期の年代の可能性を考えていたものである。当軒丸瓦の瓦当を観察すると流麗な作りで後出的様相もなく圏線をもつなど、仙台市郡山遺跡・古川市名生館遺跡の軒丸瓦と技法的に共通する点もみられ、これらの点を併せ考えても上記の年代を与えうるものと考える。

当遺跡は瓦が散布する所として古くより知られ、寺院又は官衙の性格をもつ遺跡として考えられてきたが、積極的に立証する資料をもちえないのが現状である。出土遺物の中で瓦類に着目すると、多種にのぼる瓦群の存在、それに付随する時間幅の存在。技法を異にする二者の瓦群の存在、特に丸瓦１・２類・平瓦１・２類の存在は遺跡の性格とともに変遷を考える上での課題となるものと思われる。今後の資料の増加に期するものが大きい。

参考文献

石田茂作：「仏教の初期文化」岩波講座『日本歴史』1934年

伊東信雄：「燕沢古瓦出土地」仙台市史３　「燕沢古瓦出土遺跡」『仙台の文化財』宝文堂

原田良雄編：『東北古瓦図録』雄山閣

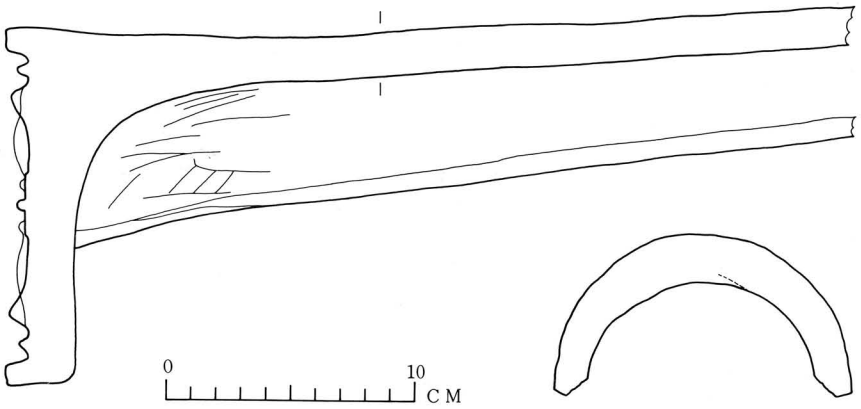
内藤政恒：「仙台市台ノ原・小田原瓦窯祉群と出土の古瓦(Ⅲ)」『歴史考古』第12号

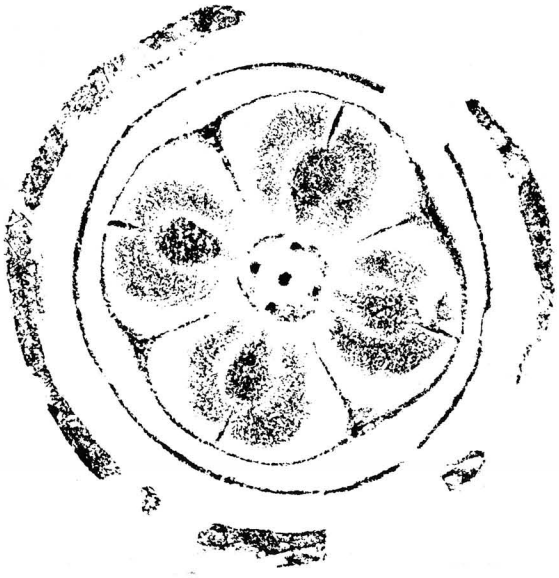
進藤秋輝：「多賀城系古瓦の二系統」『研究紀要Ⅴ』宮城県多賀城跡調査研究所

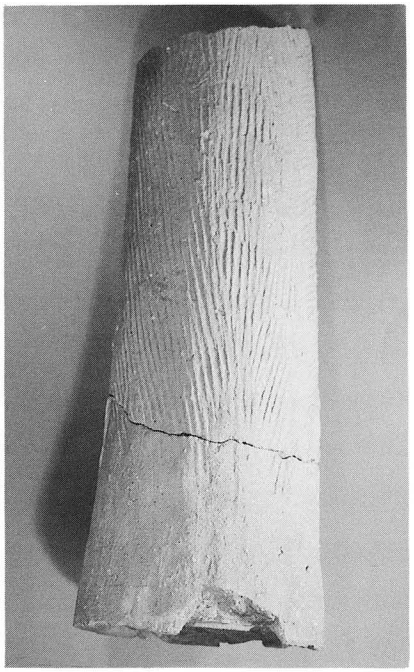
仙台市教育委員会：『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第39・62集

〃　　〃　　：『郡山遺跡Ⅰ～Ⅵ』仙台市文化財調査報告書第29・38・46・64・74・86集

宮城県多賀城跡調査研究所：『名生館遺跡Ⅰ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第６冊

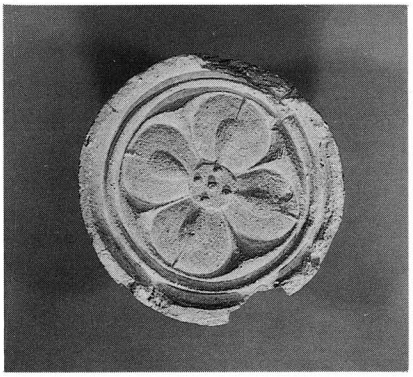






丸瓦部
凹面

丸瓦部
凸面



単弁四葉蓮華文軒丸瓦

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第 1 集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年 4 月）
第 2 集　仙台城（昭和42年 3 月）
第 3 集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年 3 月）
第 4 集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年 3 月）
第 5 集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年 8 月）
第 6 集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第 7 集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年 3 月）
第 8 集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年 5 月）
第 9 集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年 3 月）
第 10 集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年 3 月）
第 11 集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年 3 月）
第 12 集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年 3 月）
第 13 集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年 3 月）
第 14 集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年 3 月）
第 15 集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年 3 月）
第 16 集　六反田遺跡発掘調査（第 2 ・ 3 次）のあらまし（昭和54年 3 月）
第 17 集　北屋敷遺跡（昭和54年 3 月）
第 18 集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年 3 月）
第 19 集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年 3 月）
第 20 集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年 3 月）
第 21 集　仙台市開発関係遺跡調査報告 1 （昭和55年 3 月）
第 22 集　経ヶ峯（昭和55年 3 月）
第 23 集　年報 1 （昭和55年 3 月）
第 24 集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年 8 月）
第 25 集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第 26 集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年 3 月）
第 27 集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年 3 月）
第 28 集　年報 2 （昭和56年 3 月）
第 29 集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年 3 月）
第 30 集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年 3 月）
第 31 集　仙台市開発関係遺跡調査報告 2 （昭和56年 3 月）
第 32 集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年 3 月）
第 33 集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年 3 月）
第 34 集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第 35 集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第 1 次調査報告（昭和57年 3 月）
第 36 集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年 3 月）
第 37 集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年 3 月）
第 38 集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年 3 月）
第 39 集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年 3 月）
第 40 集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年 3 月）
第 41 集　年報 3 （昭和57年 3 月）
第 42 集　郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年 3 月）
第 43 集　栗遺跡（昭和57年 8 月）
第 44 集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第 45 集　茂庭―茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書―（昭和58年 3 月）
第 46 集　郡山遺跡Ⅲ―昭和57年度発掘調査概要―（昭和58年 3 月）
第 47 集　仙台平野の遺跡群Ⅱ―昭和57年度発掘調査報告書―（昭和58年 3 月）
第 48 集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年 3 月）
第 49 集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年 3 月）
第 50 集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年 3 月）
第 51 集　仙台市文化財分布地図（昭和58年 3 月）
第 52 集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第 2 次調査報告（昭和58年 3 月）
第 53 集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年 3 月）

第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集　南小泉遺跡―青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年3月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年3月）
第57集　年報4（昭和58年3月）
第58集　今泉城跡（昭和58年3月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）
第60集　南小泉遺跡―倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書―（昭和58年3月）
第61集　山口遺跡Ⅱ―仙台市体育館建設予定地―（昭和59年2月）
第62集　燕沢遺跡（昭和59年3月）
第63集　史跡陸奥国分寺跡昭和58年度発掘調査概報（昭和59年3月）
第64集　郡山遺跡Ⅳ―昭和58年度発掘調査概要―（昭和59年3月）
第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ―昭和58年度発掘調査報告書―（昭和59年3月）
第66集　年報5（昭和59年3月）
第67集　富沢水田遺跡―第1冊―泉崎前地区（昭和59年3月）
第68集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第3次調査報告（昭和59年3月）
第69集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ（昭和59年3月）
第70集　戸ノ内遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）
第71集　後河原遺跡（昭和59年3月）
第72集　六反田遺跡Ⅱ（昭和59年3月）
第73集　仙台市文化財分布調査報告書Ⅱ（昭和59年3月）
第74集　郡山遺跡Ⅴ―昭和59年度発掘調査概報―（昭和60年3月）
第75集　仙台平野の遺跡群Ⅳ（昭和60年3月）
第76集　仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書（昭和60年3月）
第77集　山田上ノ台遺跡―昭和59年度発掘調査報告書―（昭和60年3月）
第78集　中田畑中遺跡―第2次発掘調査報告書―（昭和60年3月）
第79集　欠ノ上Ⅰ遺跡発掘調査報告書（昭和60年3月）
第80集　南小泉遺跡―第12次発掘調査報告書―（昭和60年3月）
第81集　南小泉遺跡―第13次発掘調査報告書―（昭和60年3月）
第82集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ（昭和60年3月）
第83集　年報6（昭和60年3月）
第84集　仙台市文化財分布調査報告書Ⅲ（昭和60年3月）
第85集　宮城県仙台市愛宕山装飾横穴古墳発掘調査報告書（昭和60年8月）
第86集　郡山遺跡Ⅵ（昭和61年3月）
第87集　仙台平野の遺跡群Ⅴ―昭和60年度発掘調査報告書―（昭和61年3月）
第88集　上野遺跡発掘調査報告書（昭和61年3月）
第89集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ（昭和61年3月）
第90集　若林城跡―平安時代の集落跡（昭和61年3月）
第91集　東北電力鉄塔関係遺跡調査報告書（昭和61年3月）
第92集　五城中北窯跡発掘調査報告書（昭和61年3月）
第93集　年報7（昭和61年3月）
第94集　仙台市文化財分布調査報告書Ⅳ（昭和61年3月）
第95集　柳生（昭和61年12月）
第96集　郡山遺跡Ⅶ（昭和62年3月）
第97集　仙台平野の遺跡群Ⅵ―昭和61年度発掘調査報告書―（昭和62年3月）
第98集　富沢―富沢遺跡第15次発掘調査報告書（昭和62年3月）
第99集　五本松窯跡発掘調査報告書（昭和62年3月）
第100集　山田上ノ台遺跡発掘調査報告書（昭和62年3月）
第101集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅵ（昭和62年3月）
第102集　六反田遺跡Ⅲ（昭和61年3月）
第103集　元袋Ⅲ遺跡発掘調査報告書（昭和62年3月）
第104集　富沢遺跡―東北地方建設局長町宿舎建設工事に伴う発掘調査報告書（昭和62年3月）
第105集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和62年3月）
第106集　仙台市文化財調査報告書Ⅴ（昭和62年3月）
第107集　年報8（昭和62年3月）

職　員　録

文化財課

課　長　早坂春一

文化財管理係

係　長　佐藤政美
主　事　桑島栄男
〃　岩沢克輔
〃　山口　宏

文化財調査係

係　長　佐藤　隆
主　事　結城　慎一
〃　木村　浩二
〃　篠原　信彦
教　諭　佐藤美智雄
〃　小野寺和幸
〃　太田　昭夫
主　事　佐藤　洋
〃　金森　安孝
〃　佐藤　甲二
〃　吉岡　恭平
教　諭　小川　淳一
主　事　工藤　哲司
〃　渡部　弘美
〃　主浜　光朗
主　事　斎野裕彦
〃　佐藤良文
〃　長島栄一
〃　及川　格
教　諭　千葉　仁
〃　松本清一
主　事　中富　洋
〃　平間亮輔
〃　高橋　泰
〃　鈴木善弘
〃　松本素明
〃　佐藤　淳
〃　渡部　紀
派遣職員　高橋勝也

仙台市文化財調査報告書第107集

昭和61年度

年　報　8

昭和62年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会文化財課

印刷　針生印刷株式会社

仙台市六丁の目西町１－３８
ＴＥＬ２８８－５０１１